
瑠璃とお菓子

くるひなた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

瑠璃とお菓子

【Zマーク】

N7254Y

【作者名】

くるひなた

【あらすじ】

皇太后陛下付きの一一番年若い侍女は、亡き母に習つたお菓子作りが得意だった。彼女と泣く子も黙ると恐れられる宰相閣下の、これから。

瑠璃と栗（前）

ルリの人生は、一度没落しかけた。

ルリの父は、大国グラティアトリアの名のある侯爵であった。広大な領地を有し多くの領民を抱え、おかげで数ある貴族の中でも特別優雅を誇っていた。

母は正妻ではなく愛人の立場であつたが、彼女は父を深く愛していたようだ。

しかし、やがて侯爵家は栄華に溺れ、領民に圧政を敷き始める。溢れる財力にものを言わせて、王宮での発言権を増した父は汚職に塗れ、そういう輩が私利私欲で国政を食い荒らし、大国の内部はだんだんと腐敗していった。

そんな危機的状況を開いたのが、皇帝フリードリヒ崩御に伴い即位した、彼の第一子ヴィオラントだ。

銀髪と紫の瞳の絶世の美貌を誇る新皇帝は、成人を迎えたばかりの傀儡皇帝だとなめてかからうとした古狸共をものの見事に返り討ちにし、その全身を血塗れにして王宮の腐敗の中を突き進んだ。

国政を乱し、領民を苦しめた罪で、多くの貴族が彼の手により首を刎ねられた。

その中には、ルリの父も含まれていた。

父は、領民に重すぎる税を課し、男達を私用の労働にかり出し、女や子供を飢えさせた。

それを諫める部下や陳情に訪れる領民の代表達を処刑するなど、数々の私刑も繰り返していた。

それらの深い罪を、命をもつて償うのは当然のことかもしれない。当主を処刑された侯爵家は財産の全てを没収され、ある者は路頭に迷い、ある者は復讐と称して皇帝に刃を向け、彼の臣下に返り討ちにされた。

その時、ルリは六歳になつたばかりだった。

もともと、愛人の子であるルリは父の屋敷に住まわせてもらえるわけもなく、王城の近くに屋敷を与えられて母と一緒に住んでいた。しかし、当然父名義のその屋敷も没収の対象となつた。

住む所を無くし、父からの生活費も途絶え、今や罪人となつた侯爵と関係したことで母方の実家からも干され、ルリと母も路頭に迷うしかなかつと思われた。

しかし、そんな母子に救いの手を差し伸べた人がいる。

亡くなつた皇帝フリードリヒの正妃であり、新皇帝ヴィオラントの義理の母、エリザベス皇太后陛下だ。

ルリの母は、もともとは彼女の侍女を務めていた。それがきっかけで父に見初められ、ルリを生んだのだ。

母子の窮状を聞きつけた皇太后は、再び母を自分の侍女にと召し上げ、王宮内に部屋を与えて一人を住まわせてくれた。

さらには、ルリに侍女見習いをさせる傍ら、一通りの教育まで受けさせてくれたのだ。

それから九年後、母が病を患つてルリの成人を待たずに亡くなると、皇太后陛下はルリの後見を買って出て、翌年の成人の儀を母に代わつて心から祝つてくれた。

慈愛の溢れる皇太后陛下へのルリの感謝は計り知れず、好きな道に進んでいいと言つてくれた彼女に対し、一生侍女としてお側にお仕えさせて下さいと請うた。

彼女の側は心地よかつた。侍女の先輩達も、姉のようにルリを気遣つてくれる。

一の姫であるミリアニースは騎士となり、皇太后陛下の第一騎士としていつも側にいたが、侍女のルリにも優しく接してくれた。

そして、時々顔を出すのが、ルリとは同じ年の末の御子であるルドヴィーケ。

彼は、ルリの父を肅清し、歴史に残る大改革を成し遂げて退位したヴィオラントの跡を継いで、十六歳で新たな皇帝となつた。

さらに皇太后陛下には、隣国コンラートの王妃となつた一の姫ア

マリアスと、もう一人。

夫であるフリードリヒの側室で、リュネブルク公爵家の一人娘マジエンタが生んだヴィオラントと同腹の子 クロヴィス・オル・リュネブルク。

マジエンタは彼を産み落とすと引き換えに亡くなり、心優しい皇后陛下は、いわゆる愛人の子であるクロヴィスまでも我が子と変わらず深い愛情を持つて育てたのだ。

リュネブルク公爵家を祖父より受け継ぎ、グラディアトリアの宰相となつた彼は、一見穏やかで優しげな紳士であるが、その瞳は冷たく厳しいと恐れられている。

時々名のある美女と浮き名を流しながらも、特定の恋人を持たないことも有名であった。

彼も、そして退位しレイスウェイク大公爵となつて王宮を出たヴィオラントも、やはり成人を過ぎた男性だから、あまり皇太后陛下の元を訪れることはなかつた。

しかし、ある時を境に、そんな皇太后の息子達が頻繁に彼女の私室に集まるようになつていた。

そのきっかけとなつたのが、少し前に先帝ヴィオラントに嫁いだシュタイアー公爵家の令嬢であり、そんな貴重な存在である彼女は今、ルリの目の前の地面に踞つっていた。

「スミレ様？」

その日、侍女頭から使いを頼まれたルリは、一人街に下りていた。街の小さな雑貨屋の一つに、腕がいいと評判の細工師がいて、彼に頼んでいた髪飾りが出来上がつたのを受け取りに行つたのだ。

ついでに他の店を自由に見て回つてもいいですよ、と侍女頭はルリを送り出した。

年頃の娘らしく街にショッピングに繰り出すわけでもなく、休日も一人王城の図書館で過ごすようなルリを気づかってくれたのかも

しない。

そんな侍女頭のおせつかいに苦笑しつつ、せつかくだからと少し街をぶらぶらしてきたルリは、王城に戻ると真っ直ぐに後宮を目指して歩いていた。

普段は回廊を通るのだが、実は裏の庭を通った方が、城門からは近道なのだ。

そうして、緑の芝生を踏みしめて歩いていたルリの前に、突然彼女は現れた。

「スミレ様、如何なさいました？」

ふわふわぐるぐるの柔らかい髪は世にも珍しい漆黒の色。

瞳の色は、彼女の夫である先帝ヴィオラントと同じ、稀少な紫。長い睫毛に大きな瞳、ちょんと小さい鼻と口は、シンメトリーの絶妙なバランスで配置された、誰しもが認める美しさ。

そんな文句なしの美少女は、ルリが慌てたように声をかけると、踞つて足元に向けていた視線を彼女に向かえた。

「あつ、ルリさんだ。ここにちは」

「 つ……」

ピンクの頬をしたとびきり可愛らしい笑顔が零れ、鈴のなるような声がルリの名を紡いだ。

ルリは思わず息を飲む。侍女頭ならまだしも、ルリのような裏方の仕事がメインの侍女の名など、大公爵夫人が憶えてくれているとは思つてもいなかつたからだ。

その思いがそのまま顔に出ていたのか、少女はクスクスと笑つて言つた。

「何度も皇太后様のとこにお邪魔してるんだから、美味しいお菓子

用意してくれる人の名前くらい知つてるよ。ルリさんは、焼き菓子が得意なんでしょ？ この前もらつたくるみ入りのやつ、すっごく美味しかったー

「あっ、ありがとうございます！」

焼き菓子が得意なのは母だった。母の作ったそれを皇太后陛下が喜んで食べて下さるので、ルリも習つたのだ。

城の料理長にも負けないわつと、こつそり耳打ちして下さる皇太后陛下は、大切な客人にのみルリの菓子を提供する。

初めて訪れた時からルリの菓子で持て成されたこの愛らしい公爵令嬢が、皇太后陛下にとつてもグラディアトリアの皇族全員にとつても、特別に大切な存在であると、もう誰もが知る所だった。

「こんな所で、何を？ ……大公閣下どー」一緒にではないのですか？」

ルリが側に近づくと、レイスウェイク大公爵夫人スミレは、ぴょこんと立ち上がった。

ルリも大きい方ではないが、彼女はもつともつと小さくて、こちらをうかがう上目遣いは女であつてもドキリとするほど可愛らしい。年は一つ下の十六歳で、夫である大公閣下とは十一も離れていて、かのお方の奥方への溺愛はそれはそれは凄まじいと聞く。

よく一人でこんな所をうろうろすることをお許しになつたな、と思いつながら問うと、スミレは「あのね」と上を指差した。

「そこの二階、クロちゃんの執務室なの。ヴィーは今そこで難しい話をしているから、退屈だから出てきちゃつた」

「はあ……」

“クロちゃん”とは泣く子も黙る宰相閣下クロヴィス・オル・リュネブルク公爵、“ヴィー”は彼女の夫であるヴィオラント・オル・

レイスウェイク大公爵。

「この可愛らしい少女にだけ呼ぶことが許された渾名を正しい名前に変換しつつ、ルリは上階を振り仰いだ。

「部屋から見える所にいるならいって言われたから」

「それで『ございますか』

「そしたら、『ここに栗が落ちてたの』

「え？」

そういう彼女の掌を覗き込むと、なるほど大振りの木の実が握られている。

「『の国では、栗は食べないんでしょう？』

「そうで『ございますね。それは大抵、庭園に住まう動物の食糧や家畜の餌になりますね』

「ところがどっこい、これってば蒸したり焼いたりしたら美味しいんだよ？ 私の故郷では、秋の味覚として重宝されてたの『まあ……』

それはルリにとっては初耳だった。

とげとげのいがに包まれたその木の実は、確かにドングリなどと比べて大振りだが、人間の食用とはされていなかつたのだ。

スミレはルリの見守る中、熟れて枝から落ちたいがを器用に木の棒で挟じ開けて、中に二三個仲良く並んだそれを取り出すと、掌の上に載せてまじまじと眺めている。

「スミレ様、これの皮を剥いてから蒸したり焼いたりすればよろしいですか？」

「うーん、皮はとっても硬いからね。怪我しちゃうといけないから、まずは皮付きのまま茹でたらいいと思うよ。それでね、熱を入れて

から皮」とナイフで半分に切つて、中身をスプーンでくり抜くとい
い」

ルリはなるほどと頷きながら、少女の言葉に耳を傾けた。
大公爵夫人という立場ながら、スミレが料理に造詣が深いというのは、特に後宮に仕える者の間では有名な話だ。

皇太后陛下の元を訪れる度に手作りのお菓子を差し入れ、それは毎回彼女に仕える侍女達にも振る舞われる。

ルリも何度かご相伴にあずかり、その腕前が本物であることは疑うべくもない。

しかも、元来甘いものが苦手で、子供の頃から菓子の類いを一切口にしなかつた先帝ヴィオラントが、彼女が作った菓子だけは躊躇なく口に入る。

そんな、様々な面において貴重で愛すべき大公爵夫人は、小さな掌の上で木の実をころころ転がしていたが、突然自分のドレスの襟元をちゃんと引っ張ると、慎ましい膨らみの中にそれをぽいぽいと放り込み始めた。

「スッ、スミレ様！ 何をなさいますっ！？」

「持つて帰つて蒸そうかと思つて。でも、この服ポケットないんだもん。手に持てるのなんて限られてるし……」

「いけませんっ！ そんな所に入れてはなりませんっ！」

驚いたルリは無礼も忘れ、彼女の小さな手を掴んでやめさせると、慌てて懷から取り出したハンカチの四方を合わせて結びつけ、即席の手提げ袋を作り上げた。

その中に、拾い上げた木の実を詰めてやると、スミレはルリを見上げてにこりと笑う。

「ルリさん、ありがとうございます」

その笑顔を向けられると、何だか彼女が何をやつてもを許してしまいそうな気がして、かの先帝陛下がこの小さな奥方を目に入れても痛くないほど溺愛しているのも、ルリはひどく納得がいった。そうして、ひとしきり栗を拾い集めて袋がいっぱいになると、いがを棒で小突いていたスミレがひょいと上を見上げた。

彼女は、宰相の執務室であるという一階の窓を見つめ、しばしの間何やら考え込んでいたが、おもむろに実が詰まつたままのいがを一つ掴み上げた。

それを見たルリは、柔らかな肌を棘が傷付けるのではないかと焦つたが、ふんわりと丸めた掌で器用にいがを包み込んだスミレは、「さすがに、いがはまずいか」とぽつりと独り言を漏らすと、その中から実を一つだけ摘み上げた。

そして、大きく腕を振りかぶったと思つたら、「えいやつ」と、それを件の一階の窓めがけて放り投げたのだ。

「 つ……！」

「おー、入つた入つた」

絶句するルリを尻目に、狙い通りの場所に放り込むことに成功したらしいスミレは、得意げに胸を張つた。

「 スミレか？」

それに対し、一階の窓から降つてきたのは、穏やかな低い美声だった。

思わず振り仰いだルリの目に飛び込んできたのは、陽の光に透ける絹糸のような白銀の髪を携えた美貌。

記憶の奥にこびり付いた恐怖に、ルリは知らずに息を呑み身を強張らせた。

先帝ヴィオラント ルリの父の首を刎ねた張本人だ。

ルリ自身は、彼に対して恨みも憎しみも抱いてはいないが、母は皇太后陛下には深い恩義を感じつつも、死ぬまでずっとヴィオラントを怨んでいたように思つ。母は、確かに父を愛していたのだから。

恐れ多い男を前にし、慌ててルリは頭を垂れる。

対して、無邪気な様子で彼に手を振つたスミレは、楽しそうな声で尋ねた。

「ヴィー。今の、クロちゃんにヒットした?」

「したぞ。煮詰まつっていた頭が真っ白になつてゐる」

無表情と名高い美貌が、愛する奥方の前ではかすかに綻ぶ。それをちらりと盗み見したルリは、無意識にほつと息を吐き出した。

可笑しそうな声色で妻に答えたヴィオラントが室内を振り返つたと同時に、がばっと彼の傍らから顔を出したのは、今度はその部屋の主たる宰相クロヴィスだ。

どうやら先程スミレが投げ込んだ栗は、見事に彼の頭に命中したらしい。

こつちはどこまでも涼やかで冷静な宰相閣下が、その眦をつり上げて階下の少女を怒鳴りつけた。

「一いちひ、この悪戯娘! 窓にものを投げ込むんじゃないですよつ！」

自分が叱られたわけでもないのに、ルリは思わずビクリと竦み上がる。しかし、当の本人はとつと、怒りのオーラを噴き出す宰相閣下に怯むことのなく、にこりと笑顔を返した。

「ちがうよー、私が投げたんじやないよー。可愛い可愛いリスさん

が、それからお茶の時間だよって、仕事馬鹿な宰相様に教えてくれたんだよー」

「その堂々と嘘を吐き出す可憐い唇を摘んであげますから、わざと上がつてきなさい」

平気でデタラメを言つ少女に対し、どこか諦めたようなため息をつきながら眉間の皺を手で揉んだクロヴィスは、ふと視線をスミレの傍らにいた侍女に向けた。

「ヤニのあなた」

「あっ、はっ、はいっ！」

突然声をかけられたルリは、慌てて背筋を伸ばして返事をする。若い侍女の初々しい反応にこつそり苦笑したクロヴィスは、向かいの兄、ヴィオラントを何とか問うように見た。心得た、ヴィオラントがそれに頷いて返すと、彼は再び窓の下のルリに向き直った。

「あなたの仕事を増やしてしまつて申し訳ないですが、そこにいる私の義姉をここまで連れてきてはくれませんか」

「はい、私でようしければ」

「すみませんね、ようしひくお願ひしますよ ルリ」

「 つ……！」

ルリは再び息を呑む。

まさか、若き皇帝を支えてグラディアトリアを統括する宰相閣下まで、ただの侍女の名を知っているとは思わなかつた。

その傍らの紫の瞳も、何もかもを知っているかのように、静かにルリを見据えている。

おそらく、彼は 彼らは、ルリの生い立ちについても把握しているのだろう。

肅清された貴族の庶子であるルリが、今後不穏の種となるかどうかも、きっと見定められているに違いない。

ルリ自身、父の一族の恨みを晴らすとも、国家の転覆を狙おうとも思わないが、それをし得る動機のある人間として、マークはされているのかもしれない。

そう思つと、ルリの心はどんどん冷たく凍えるようだつた。

しかし

「ルリさん、一緒に行つてくれるの？」

そう言つて、ルリの手に触れたのは柔らかな温もり。あどけない大公爵夫人の、小さく壊れそうな掌が、ルリと手を繋ぐようにそつと絡まつてきた。

その時ルリははつとして、再び階上を振り仰ぐ。

自分と少女に降り注ぐ一対の瞳は、ただただ温かく、疑惑などかけらも混ざつていないうに思えた。

大切な大切な少女を、ルリは託された 託してもらえた。

それは、彼らがルリを少しも疑つていないという証拠であり、そのことをルリに教えるための最適の手段とも思えた。

父の犯した罪から離れられなかつたのは、ルリ自身だつた。自ら柵の蔓に絡まりにいつて、人の目を恐れて疑心暗鬼になつてしまつていたのだ。

それがどれほど愚かで無益なことかと、この時ようやく気づかされたような気がした。

胸が、じんと温かくなつた。

ルリは、大切な少女の手を優しく握り返し、そつと引いて歩き始めた。

「一緒に参りましょうか、スミレ様」

『スリ

瑠璃と栗（後）

「“ルリ”って、素敵なもの前ね」「まあ、ありがとうございます」

ルリという名は、母がつけてくれた名だ。

短く、特別に深い意味もない語句だが、皇太后陛下が「鈴の音のようで可愛らしいわ」と言ってくれるので、とても気に入っている。そんなルリの名を、ふわりと絡めた柔らかな手の主にも褒められて、また嬉しくなった。

「ルリってね、私の故郷では青色をした鉱物の名前で、宝物になるんだよ」

「まあ、そうなのですか？」

まだ王宮の建物に入る手前、スミレはそいつひと、拾い上げた小枝で土の地面に何やら書き始めた。

『瑠璃』

それは、ルリが今まで見たことのないような幾何学的な紋様で、もちろんさっぱり理解できなかつたが、スミレはそれでもかまわないようだつた。

「金・銀・瑠璃に瑪瑙に……あとは忘れたけど、とにかく七つの宝物・七宝の一つで、とっても綺麗な青色をしているの ルリさん の瞳みたい」

金銀は、グラディアトリアでも装飾品にと重宝され、それらはたいてい高級なものなので、それと並ぶ宝物に自分の名前を例えられたルリは何だか照れくさかつた。

しかし、愛する母譲りの、そして慕わしい皇太后陛下とも似ていると言われる瞳を褒められたのは、とても嬉しく誇らしかつた。

愛らしいレイスウェイク大公爵夫人の手を引いて王宮を歩けば、当然ながら多くの視線が集まってきた。

けれどそのどれもが好意的で、彼女がどれほどこの国の人々に歓迎されているのかがよく分かる。

いつもはツンと澄ました貴族のご令嬢様まで、「いいわね、その手を譲つてほしいわ」と、手を繋いだルリを羨ましがるほどだつた。スミレはそんな人々に対して、とにかくにこにこと笑顔を返していくが、けしてルリの手を離すことはなかつた。

それは彼女が、大公爵夫人としての立場上愛想よく応対しながらも、実はそれほど社交の場が得意ではなくて、ルリの手に縋つて早くその場を切り抜けたいと望んでいるようにも感じた。

そう思つと、ルリの中ではこの親しみ溢れる高貴な少女への庇護欲がむくむくと膨れ上がり、巧みに彼女を庇いながら目的地である宰相執務室を目指した。

そうして辿り着いたのは、見上げるほどの大きな扉。

ルリが仕える皇太后陛下の私室のそれと似てゐるが、宰相執務室の扉はさらに重厚な雰囲気があつて、ノックをする手が思わず躊躇した。

それでも、片手に握つた柔らかな掌に奮い立たされ、ルリは控えめにそれを叩いた。

「おかえり」

ノックに応える声よりも早く、内側から扉を開いてそう柔らかな声で出迎えたのは、この部屋の主ではなく、その兄である先帝、ヴィオラントだった。

思わず近い距離で彼に相対してしまったルリは、何度見ても見慣れぬ至高の美貌にびっくりと竦み上がる。

繋いだ手からそれを感じたのか、スミレはルリを見上げて小さく苦笑を漏らすと、今度は逆に彼女の手を引っ張つて部屋の中へと連れ込んだ。

「ヴィー、ただいま」

「ああ。スミレ、何を持って帰ってきたのだ？」

「栗だよ」

スミレが自分で持つと言ひて、片手にぶらぶら下げてきた袋をヴィオラントに見せつつ、その入れ物をルリが正面したことが告げられる。

すると、怜悧な目元を優しく緩めて妻の話を聞いていた先帝陛下の視線が、すっとルリを捉えた。

思わず全身を緊張に強張らせた侍女に、彼もまた苦笑するように瞳を細めると、大切な少女を抱き寄せつつ言つた。

「妻が世話になつたな。礼を言ひつけ」

「 いっ、いえっ！」

「 そなたも、義母上の使いの途中だったのではないか？ 手間を取らせてすまなかつた」

「あ……いえ、急ぎの用ではありませんでしたし、帰りの時間も定められていませんので大丈夫です それに」

ルリは相変わらず緊張が解けることはなかつたが、ずっとどこか遠く恐ろしいばかりだった先帝陛下が、自分が手を引いてきた小さな

な少女を大事そうに腕に抱き、愛おしくて堪らない様子で頬を寄せる様を見ていると、何だか心の奥が柔らかく解れていくように思えた。

そして、そんな彼らを見ていると、自然とルリの唇から温かな想いがもれ出した。

「スミレ様どー」一緒に嬉しうつむきました。思いがけずお会いできて、楽しい時間を過ごさせていただきました」

媚でも諂いでもない。本心からにじみ出た言葉とこゝのは、相手の心に真っ直ぐ届くのだ。

ルリの言葉を聞いたスミレは、ふっくらとした頬を薔薇色に染め、溢れんばかりの笑顔を返してくれた。

その頬に、愛おしげに口付けしたヴィオラントは、無表情と有名な美貌をわずかに確かに綻ばせて、ルリに囁つた。

「そう言つてもらえたと、ありがたい。そなたとスミレは年も近い。また、相手をしてやつてくれ」

「はつ、はいつ！ 喜んでつ！！」

そんなやりとりを、執務机に凭れて微笑ましく見守っていたのは、この部屋の主である宰相クロヴィスだ。

対して彼をじっと見つめたスミレは、おもむろに袋から栗を両手で掬つて取り出すと、ヴィオラントの腕の中から伸び上がり、宰相の執務机の上にそれを『ころころ』と転がした。

「ひひひ。おもちゃを仕事机の上に散らかさないで下さいよ

「おもちゃとは何だね、クロヴィス君。これはれつきとした食料だよ

「そうですね。義姉上様のような小動物には、いい餌になるかもし

れませんね」

「いいえ、クロちゃんみたいな大型の動物の餌にもなるのですよ」

「……」

ルリは、かの宰相閣下が小さな少女に言い負かされたのを田の当たりにして、信じられない思いだつた。

ふと見れば、そんな二人のやりとりを、先帝陛下が実に面白そうに眺めている。

ルリは実のところ、暇乞いをするタイミングを逃してしまつていたのだが、高貴な方々は誰も彼女に出て行けとは言わないので、黙つて空氣に徹することにした。

「あのね、今まで誰も食べなかつたからつて、食べられないものだと決めつけるのはつまらないよ。男の子なのに冒險心のない弟を持つて、おねえちゃんは非常に残念だ」

「木の実一つでえらい言われよつですが……それはやはり家畜の餌ですよ」

「かたいつ！ もうつ、クロちゃんつてば、ホント頭かたいつ！ そんなどから、いつも難しい顔して書類と睨めっこしなきやなんないのよ。柔軟な考えができれば、ぱあつと名案が閃くこともあると思つんだよ」

「なるほど、一理あるな」

「兄上つ……！」

うむと頷いて先帝陛下が口を挟むと、冷厳と有名な宰相閣下が情けない声を上げた。

そんな、初めて目にする皇族方の微笑ましいやりとりに、ルリは恐れ多くも笑いを堪えるのに必死だつた。

“硬い実だから食べられない” “誰も食べたことないんだから食

べられない”でも、実は中身は意外に柔らかくて、しかも手を加えたら甘くて美味しいだなんて、食べてみなくちゃ一生分からないことだよ」

「…」

それは、一見木の実のことを指しているように見えて、実は国政の事案に頭を悩ますクロヴィスを導く言葉だった。

もちろん、スミレは彼が何に悩んでいるかも、それが国政にとつてどれだけ重要な問題かも知りはしないが、頑に凝り固まつた考え方や価値観では、新たな答えは何も生まれて来ないと言いたいのだ。先帝陛下の言う通り、「確かに一理ある」と思ったのはルリだけではなかつたようで、言われた本人であるクロヴィスもはつとそれに気づかされたのだろう。

彼は綺麗に整えてあつた金髪をくしゃりとかき乱すと、ふつとため息をついて苦笑をもらした。

「なるほど、何よりもやせつてみなければ分からぬとは、その通りですね。確かに、私は少々頭が固かつたかもしません」「少々じゃなくて、めっちゃんくつちゃんと固いんです。かつちんこつちんです」

「スミレ、今田のところはそれくらいにしてやりなさい

自らの不肖を認めたクロヴィスに、容赦なく畳み掛けるスミレと、それを呆れたように嗜めるヴィオラント。

そんな彼らのやりとりに、笑いを堪えるルリもそろそろ苦しくなつてきた。

しかし幸い、いたいけな侍女の腹筋に限界が訪れる前に、皇族方の喜劇の舞台はお開きとなつた。

「この事案については、過去の例はこの際参考程度にとどめ、もう

一度一から考え方直してみます

そう言つて、執務机の上に広げていた書類を束ねたクロヴィスに対し、その兄ヴィオラントも「それがいいだろう」と頷いた。

退位した彼は、相談程度であれば話を聞かないことはないが、国政の中核に関わるようなことには意見も述べないようにしている。それは、玉座を譲った末弟ルドヴィークの顔を立てるためであるとともに、彼らの手腕を信頼しているとの証なのだ。

憑き物がとれたような笑みを浮かべた弟に安心したのか、ヴィオラントは栗の入った袋を持ち直した妻スミレを促すと、宰相執務室をあとにした。

日が落ちない内に屋敷に戻るのが、レイスウェイク大公爵夫妻の常だ。

最近では、王城訪問のついでに街に立ち寄り、のんびりと散策を楽しんでから帰る場合もあるらしい。

そうして、ヴィオラントは、扉の外まで見送つて礼を言う弟の肩を労るように叩き、小さな奥方の柔らかな手を、先ほどルリがしたように優しく握つて去つていった。

その背中を今までにないほどの親しみと微笑ましさを感じながら見送り、振り返つて「ルリさん、またね」と微笑むスミレに深々と頭を垂れながら、ルリはその時はたどあることに気づいた。

またしても、宰相閣下の執務室を去るタイミングを逃してしまったのだ。

慌てて顔を上げたルリは、大公爵夫妻の後を追う形で部屋から出ようとしたが、それよりも一步早く、兄夫婦を見送り終わった宰相閣下が、パタリと扉を閉めてしまった。

「……」

再び、ルリの表情は激しく強張った。

泣く子も黙る宰相閣下。

美しい笑顔で愚かな爺どもを扱下ろし、使えない人間は容赦なく切り捨てる鬼の宰相。

そして、数々の美女と浮き名を流しながらも、その誰にも心は『えない冷たい美貌。

そんな噂の宰相閣下と、思いがけず一人つきりになってしまったルリは、極度の緊張に襲われる。

引きつる喉から何とか声を絞り出して、暇の許しを得ようと口を開きかけたルリだったが、またしても相手に先を越されてしまった。

「お茶にしましょうか」

「……は、え……？」

若い侍女が可哀想なほどがちがちに緊張しているのが分かつたのか、クロヴィスは苦笑するように口元を緩めてそう言った。

それに、まともな返事も返せないルリに呆れるでもなく、彼は接客用のソファの脇に置いたワゴンへと歩いていく。

宰相閣下自ら、お茶の用意をしようというのだ。

それに気づき、ようやくはっと我に返ったルリは、慌ててワゴンへと駆け寄った。

「お待ちかね！ お茶の用意したら、わたくしがつ……！」

そう言い募るルリに対し、柔らかく瞳を細めたクロヴィスは「いいえ」と返し、ポツトに伸びた彼女の手を捕まえると、スマートな所作でソファへと導き座らせた。

「義母上の侍女であるあなたに、スミレのお守りという余計な仕事を頼んでしまったのは私です。その礼をさせて下さる」

「クロヴィス様っ、ですがっ……」

「これでも、私のいれるお茶は美味しいと、あの手厳しい義姉上のお墨付きなんですよ？」

「ですが、わたくしは……あの……あの……」

「使いの帰りの時間は定められていないと、先ほど言つていきましたよね。急ぎの用ではなかつたと。それとも、私のお茶に付き合うのは嫌ですか？」「

この宰相閣下に笑顔でそう言われて、断れる人間がいるというなら会つてみたいと、ルリは思つた。

「い……いただきます……」

「よひしい」

背中に冷たい汗を感じながら返事をしたルリに、クロヴィスは満足げに頷くと、彼女の側で茶葉の箱を開いた。

そうして、思わず見蕩れるほどの手際の良さでお茶の用意を整えた彼は、ポットとカップに視線を落としたまま話を続けた。

「そういうえば、あなたは焼き菓子を作るのが得意なのだそうですね？」

「…………え？」

「義母上はもちろん、スマレがしきりに褒めていました。先日は“この絶品は食べなきや損”と言つて、わざわざ私の口にまで放り込みにきましたよ。くるみの入つたマフィンでしたか。あれは確かに、とても美味かつた」

「あつ、ありがとうございますっ！」

宰相閣下が、お世辞を言つよつた方ではないことも、広く知れ渡つてゐる。

「介の侍女」ときに胡麻をすつて得することも当然何もないの

それは本心からの褒め言葉だとルリは理解した。

緊張がなくなることはなかつたが、ぱつと目の前が明るくなつた
ように感じた。

嬉しくて嬉しくて、ついつい大きな声で礼を返してしまつた。
そんな自分に恥じ入つて、耳まで真つ赤にして俯いてしまつたル
リにクスクス笑うと、クロヴィスはちょうどいい塩梅になつたお茶
をポットからカップへと注ぎ、彼女の前にそつと置いてやつた。

「あ、い、いただきます」
「どうぞ」

じぼして火傷をしないかと、見ている方が案じるほど緊張に震え
る侍女の手が、カップに伸びた。

そうして、きちんと教育を受けたと分かる上品な仕草で、それを
口元に持つていく。

とたん、彼女の深い青色の瞳がぱちくりと瞬き、上品に弧を描いた
口が「とてもおいしいです」と告げた。

そんな媚のない素直な様子に、クロヴィスの中でのルリへの好感
度は増していく。

クロヴィスも、自分のいれた紅茶に口を付けつつ、ふと執務机の
上に置き去りにされていたものを思い出した。

先ほど、スミレが庭で拾つて半分置いていった、大振りの木の実
だ。

「……クリつて、言つてましたね」
「はい。スミレ様は、蒸しても焼いても美味しい木の実で、ご実家
ではよくお召し上がりになられたと」
「……ふむ」

スミレが両手で掏つたそれらは、大人の男の掌ではたつたのひと

掴みだ。

クロヴィスはそれを掌の上で転がしてまじまじと眺めていたが、突然懐から真っ白いハンカチを取り出したかと思うと、先ほどルリがスミレに作つてやつたように袋状にし、その中に栗を全て放り込んだ。

そして、それをルリの方にすいつと差し出して言った。

「ルリ、あなたにお願いがあります」

「あつ、はい。何でございましょう」

「この木の実で、菓子を作つて」馳走してください」

「……えつ！？」

ルリは、突然の申し出に戸惑った。

実は、料理人でもないルリが王宮で料理を作るというのは、かなり神経を使うものなのだ。

しかも、皇族の方々に振る舞つとなると、調理場の本職の人達にバレては何かと失礼と、いろいろ気を使う。一介の侍女が出しゃばつては、彼らも気分がよくないだろう。

それでも、敬愛する皇太后陛下に請われた時は、後宮の調理場を借りて作っていたのだったが、宰相付きの侍女ではない自分が彼のために菓子を作るなど、本当に許されることなのだろうか。

そう逡巡するルリの心を見透かしたクロヴィスは、穏やかな笑みを浮かべたまま続けた。

「もちろん、無理にとはいいませんよ。あなたも正規の仕事があるのでですから、煩わせるつもりもありません」

「……」

「けれど、できればお願ひします」

「あの……」

「あなたに、作つてもらいたいのです」

クロヴィスはそう言って、カップを持ったルリに手を添えてそれをソーサーに戻させる。

びくりと、可哀想なほどに震えた華奢な手に、カップのかわりに栗の入った包みをそつと握らせた。

受け取ってしまった以上、ルリにはもう断る術は残されていない。思わず半泣きになつて声もでない侍女に対し、麗しい宰相閣下はにつこりと笑うと、とてもとても優しい声で告げた。

「その時は、また一緒にお茶を飲みましょうね」

「……」

「急ぎませんよ。でも、心待ちにしていますね ルリ」

その後、何とか宰相執務室から脱出したルリは、その足で後宮の調理場に飛び込んだ。

彼女の尋常ならざる様子に心配した先輩侍女達に、混乱したままのルリが包み隠さず事情を話すと、彼女達もひどく驚いた。

これは、一大事！

なんたつて、可愛い妹侍女が、冷厳と有名な宰相閣下の胃袋を掴んでしまったのだ。

侍女達が慌てて主たる皇太后陛下に相談に行くと、彼女は「あらあっ！」と嬉しそうに顔を輝かせた。

母は、いつまで経つても身を落ち着けない次男坊に、ついに春の兆しがやってきたのだと確信したのだ。

しかもその相手となる女性は、彼女が我が子のように慈しんで成長を見守ってきた秘蔵つ子。

この縁を逃してなるものかと、皇太后のやる気は俄然燃え上がった。

その炎は、彼女に仕えるルリの姉侍女達にも燃え移り、その日は

遅くまで、後宮の調理場は皇太后付きの侍女達によって占拠された。

そうして出来上がったのは、栗の入ったパウンドケーキ。

栗は一度茹でてから、姉侍女達に手伝われて四苦八苦して皮を剥き、内側についた渋い皮ごとシロップで甘く柔らかく煮た。それを、くるみを使う時のように食感が残るほどの大さに砕き、あとは栗を煮詰めたシロップを加えていつものパウンドケーキを焼く要領。ただし、大人の男性に振る舞うのだからと、甘さを抑える代わりにブランデーを少々加え、香りよい出来映えになった。

もちろん、誰よりも先に味見をしたのは、ルリの主人である皇太后陛下だ。

それを口にした皇太后は、「あなたは天才よっ！」と言ってルリを抱きしめ、直々に侍女頭に綺麗に切り分けてラッピングするよう命じると、翌日の午後のお茶の時間、ルリを宰相執務室へと追い立てた。

先触れは出しているので、遠慮なく扉をノックしなさいと言つて送り出してくれた皇太后の言葉に、勇気を振り絞つて扉を叩いたルリの訪問に、それはすぐに内側から開いた。

「いらっしゃい。来て下さって嬉しいですよ、ルリ
「お邪魔いたします、クロヴィス様」

ルリの緊張はまだ解れる事はないが、出迎えたクロヴィスの穏やかな顔に、今日は何とか笑顔を返すことができた。

そうして、皇太后付きの一番若い侍女が、お菓子を持って宰相執務室出入りすることが当たり前のこととなつていぐ。

彼女が、愛らしいレイスウェイク大公爵夫人を「お義姉さま」と呼ばれる日も、そう遠くない かもしねり。

瑠璃とティータイム（前）

「ルリ、お茶の時間だけど……宰相執務室に行かなくていいの？」
「いいんです」

大国グラディアトリアの國母エリザベス皇太后陛下が住まう後宮では、ここ十日ほど、一番年若い侍女ルリと姉侍女達の間でこのような問答が繰り返されている。

レイスウェイク大公爵夫人が拾つた庭の木の実をきっかけに、ルリがこの国の宰相クロヴィス・オル・リュネブルク公爵にお菓子を振る舞うようになったのは、今から半月ほど前のこと。

以来ルリは、ほぼ三日に一度の割合で、午後のお茶の時間に宰相執務室を訪れていた。

宰相クロヴィスは、ルリの深く敬愛する主人である皇太后陛下の義理の息子でもある。

冷厳な雰囲気からは想像もつかないが、彼は意外に甘いお菓子を好むようで、ルリが差し入れたケーキやクッキーをそれはそれは美味しいそうに召し上がる。

そして、そのお礼と言つては、いつも彼女に手ずから紅茶を入れてくれるのだ。

先帝に肅清されて没落した侯爵家の庶子で、皇太后陛下に仕える数ある侍女の中でも一番下つ端なルリにとつて、麗しき宰相閣下は雲の上のような方。

そんな彼と、たとえわずか半刻ほどの時間といえど、一人つきりで過ごすのは非常に緊張を強いられる。

ルリ自身口数が多い方ではないし、気の利いた話題を振れるほどの人生経験もまだない。

クロヴィスからお茶を受け取ると、決まって伏し目がちに黙り込んでしまうルリに対し、しかし彼は呆れることも失望することもなかつた。

「ルリは、休日は何をして過ごしているのですか？」

「はい、あの……、と、図書館に行きます」

「図書館？ 城ですか？」

「はい。王城の図書館には、面白い本がたくさんあって、いくら読んでも読み切れません」

「おや。あなたは相当、本がお好きのようですね」

緊張に震える声で必死に答えるルリに対し、優雅に紅茶のカップに口をつけながら耳を傾けるクロヴィスの声は、どこまでも穏やかだ。

冷たく厳しく、大の男をも泣かせると有名な宰相閣下の噂とは、だいぶ違った印象を受ける。

(厳しいのは仕事に対してだけで、普段はとても優しく穏やかな方なんだわ)

「そう心の中でこつそり認識を改めたルリに、「そうとも限らないよ……」と教えてくれる人は、今はまだいない。

少しずつクロヴィスへの畏怖と警戒を緩め始めたルリは、最近ではようやく彼の顔を見て会話ができるまでになっていた。ただし、時々視線が泳ぐのだけは致し方ない。

「クロヴィス様は、お休みの日は何をなさっているのですか？」

「ん？ 私ですか？」

社交に拙い自分に根気強く付き合ってくれる彼と、何とかスマートに会話をしたいと思いつつそつ返したルリだったが、そこではたとあることに気づいた。

いつも忙しくしている宰相閣下。

現在グラディアトリアは周辺諸国との関係も良好で、内政也非常に落ち着いた状態であるが、若き皇帝陛下を支えるクロヴィスにかかる政治的重圧というのは、ルリのような一介の侍女には想像もつかないほどのものだらう。

毎日朝早くから夜遅くまで執務室にこもっている彼に、休日などあるのだろうか。

そう思つと、ルリは何だか胸がギュッと苦しくなつた。

「わたくしのような者が申し上げるのは、とてもおこがましいことです……。お休みはきちんと取つて下さるませね、クロヴィス様」「ああ、心配して下さつていいのですか?」

「休日も返上して、執務室にこもつていらつしゃると聞きました。クロヴィス様のお忙しさは、わたくしのような一介の侍女には計り知れませんが……」

「おや、私のことを噂して下さつていたのですか?」

クロヴィスはそう言つて首を傾げると、細いフレームの眼鏡の下でふつと皿を細めた。

一方、ついついわざ話などとこはしたないと暴露してしまつたルリは、顔を真っ赤にして俯いてしまつた。

「しつ、失礼しましたっ……！」

「いいえ、かまわないのですよ。むしろ、ルリが私のことを話題にして下さつたなんて、嬉しいですね」

「も、も、申し訳ありませんっ……！」

「いいんですつてば」

自分はなんてなんてはしたないんだろうつー！ そう思つて、真つ赤な顔で俯いて涙ぐむルリに、クロヴィスは苦笑をもらしつつ、ふむと顎に手を添えた。

「別に、休日返上して仕事をしているわけではないのですよ。ただ、私は元来仕事が好きなのと、あまりうまく休日を過ごす方法が思いつかないというか……」

「……」

普段は、いちいち遅い時間に帰るのが面倒だからと、王宮内に構えた私室で寝泊まりしているクロヴィスだが、休日には時々邸宅に帰る。

しかし、これといって趣味のない彼は、邸宅に戻つてもすることがない。

同腹の兄であるヴィオラントが、皇帝を退位した後は祖母方の実家であるレイスウェイク家を名乗ると言い出したので、母の実家であるリュネブルク公爵家はクロヴィスが継いだ。

幸い、先代公爵である祖父はまだまだ健在であるので、邸宅の方はほとんど彼に任せてしまっている。

祖父は穏やかで優しい人だが、競争心がなく政治事に関してもからつきしなので、あまりクロヴィスとの間で話が弾むこともない。

とは言つても、彼は祖父のことは家族として愛しているし、邸宅に仕える使用人達のことも大切に思つている。

当主であるクロヴィスが戻れば、邸宅の人々はそれはそれは彼を歓迎し、穏やかで満ち足りた時間を用意してくれる。しかし、それに浸かつてほっこりしてしまうと、気持ちが緩んで仕事に戻った時の切り替えが難しいのではないかと、無意識の内に安らぎに対しても構えてしまう。

そんな自分を、クロヴィスも自覚していた。

だからこそ、今日の前で萎縮してしまった慎ましい侍女が時々やつてきて、一緒にお茶を楽しむそんなわざかな時間が、とても貴重で愛すべき瞬間に思えるのだ。

祖父と同じく、競争心や虚栄心の欠片もなく、穏やかで優しい侍女。

皇太后陛下に特別に目を掛けさせていたいところに少しちゃうところがなく、慎ましく大人しい少女。

割り切った女性としか関係を持たなかつたクロヴィスにとっては、まだ子供っぽくて洗練されていないルリのような相手は対象外だったはずなのだ。

それなのに

彼女がやつてくるお茶の時間が待ち遠しく、そのことで義母である皇太后陛下にからかわれるのも苦にならない。

余裕のある風を装いながらも、大人しい彼女との会話を何とか成立させるために、必死に話題を探す自分も嫌いではなくなつた。

クロヴィスは初めて、家族と仕事以外で大切な存在を見つけたのかもしれない。

「私は、休日を過ごすのが下手なんです。だから、仕事をしていると時間が潰せてほっとするんだと思います。」

「……ですが、お仕事ばかりでは息が詰まつてしまいませんか？のんびり、何もしないでゆっくり過ごされる時間も、たまには必要ではありませんか？」

ルリは顔を真っ赤にして俯いたまま。

それでも小さく返す言葉には、クロヴィスを労る気持ちが溢れていた。

それは、彼の心をふわりと優しく包んで温め、心からの笑みを浮かばせた。

「そうですね。でも、一人で上手く過ぐせる自信がないのです。誰かに隣に居てもらわないと、すぐに仕事のことばかり考えてしまいそうで」

「まあ……」

「ですから、ルリ。次の休みは

「

クロヴィスは紅茶のカップをソーサーに戻すと、流れるような仕草でそっとルリの手を取った。

まだ頬を赤らめた少女の、深い青い瞳が不思議そうに彼を見つめ返してきた。

兄ヴィオラントの愛妻スマーレが、“綺麗な瑠璃色”と讃えた宝玉だ。

吸い込まれそうに美しいそれに目を奪われながら、クロヴィスは想いの続きを口にしけけた。

しかし

「クロヴィス、この件についてだが……」

ガチャリ？？と、ノックもなしに宰相執務室の扉を開いた無礼者は、クロヴィスの弟ルドヴィーグ。

長兄の跡を継いで玉座に就いた、グラディアトリアの若き皇帝陛下だ。

書類に視線を落としながら入ってきた彼は、ふと顔を上げて目の前の光景に固まつた。

「……いらっしゃいます。??といひで、扉を開く前にノックをす

るのは、最低限の礼儀ではないでしょうか？」陛下

ルドヴィークの視線の先では、応接用のソファにテーブルを挟んで向かい合わせに座つた男女が、手と手を取り合つて見つめ合つていたのだ。

男の方は、この宰相執務室の主である兄クロヴィス。

女の方は、ここ最近何度かこの部屋で見かけたことのあった、生母エリザベス皇太后陛下付きの侍女である。

どう見ても、いい雰囲気になつていていたところに乱入してしまつたと気づいたルドヴィークは、すぐさま回れ右をして逃げ出したい気分だつた。

しかし、彼がそれを行動に移すよりも早く、慌てて立ち上がつた侍女が叫んだ。

「申し訳ありません！　ついつい長居をしてしまいましたっ！！」

「ルリ、待ちなさい」

「陛下、クロヴィス様、失礼いたします！」

顔を真っ赤にしたままぴょこんと頭を下げるが、引き止めるクロヴィスの声も聞こえないのか、脱兎のごとく宰相執務室から逃げ出したのはルリだつた。

「……」

バタンッ！　と扉が勢いよく閉められ、密室になつた宰相執務室に、とてつもなく重苦しい空気が流れた。

「……なんか、すごくめん。クロヴィス」

「……」

ルの上なく申し訳なさそうな顔で謝る弟皇帝に、怒る気力もなくしたクロヴィスは、はあ……と深々とため息をついた。

そんなことがあった日から十日。

ルリは宰相執務室に赴いていない。

「どうしたの？ 何かあったの、ルリ？」

姉侍女達が心配するのも無理はない。

この十日の中、ルリには再三かの宰相閣下から招待の声がかかってたといふのに、彼女は体調不良を理由にそれら全てを断っていたのだ。

本来なら、一介の侍女が王族でもあるクロヴィスからの招待を断ることなど無礼にあたるのだが、ルリは彼の育ての母でもある皇太后陛下の侍女であるし、彼自身権力を振りかざして無理強いするつもりもないらしい。

忙しくて仕事から手が離せない彼は、今田もまた部下の文官にルリへの招待を託してきたが、彼女はつい先ほど丁寧にそれを断つたところだった。

そんな様子をおろおろして見守っていた姉侍女達は、もじやひとつ懸念に思い至った。

「ルリ、あなた……もしかして、宰相閣下付きの侍女に、何か言われたんじゃないの？」

「……」

クロヴィス自身は他人に細々と世話を焼かれるのを嫌うので、個人的な侍女というのはつけていないが、宰相執務室として抱える侍女はいる。

彼女達はたいてい、仕事の話でやつてきた他の大臣や客人をもてなす用意や、部屋の中の整理整頓を請け負っているのだが、やはり大国の宰相に仕える侍女ともなれば、才色兼備のエリート揃い。当然家柄もよくプライドも半端ないだろうと思われる彼女達にとって、突然目の前をちらりちらりし出したよそ者侍女など、うつとうしいに違いない。

そう思つて言つた姉侍女の言葉に、ルリはびくりと身体を強張らせた。

「えっ、 そうなのっ！？」

そんなルリに、突然後ろから掛かつたのは、澄んだ高い声。

慌てて振り向くと、先日ルリと宰相閣下の縁を取り持つたレイスウェイク大公爵夫人が、大きなアメジストのような瞳をうるうるとこちらを見上げたいた。

「ルリさん、 いじわるされたの？」

「いえ、あの……」

「トウショーズに画鋲入れられた？ ドレスをハサミでチョキチョキされた？ 箱入りのネズミやゴキブリ送りつけられたっ？」

「ス、スミレ様？」

「ひどいひどいっ！ ちょっと行って、とっちめてくるっ！」

ルリがあわあわするほどぶんすかと憤ったスミレが、その勢いのまま部屋を飛び出して行こうとするのを、やはりというか、当然止めた人物がいた。

「待ちなさい、スミレ」

「……大公閣下」

「すまないな。ここに来る前に、“ヒルドラ”なるものを観てきたので影響されたらしい」「はあ……」

スミレを軽々と抱き上げて止めたのは、彼女の夫であり先の皇帝ヴィオラント・オル・レイスウェイク大公爵。宰相クロヴィスの同腹の兄である。

彼の言う通り、実家である二ホンと通じている邸宅の自室で、兄嫁と一緒にお昼のワイドショーからドロドロの嫉妬渦巻く昼のドラマを鑑賞してきたらしいスミレは、ベタな嫌がらせを勝手に想像して怒りに震えた。

「だつて、だつて、ヴィー。こんな大人しそうな女子いじめるなんて、許せない。背中にカエルを入れてやるつ！」

「少し、待ちなさい。ルリ、本当に、宰相付きの侍女がそなたに嫌がらせをしたのか？」

「い、いいえ……」

「では、何があつてあの部屋から足が遠のいたのか、理由を教えてもらえないだろ？」「

ふんふんする妻も可愛くてならないらしいヴィオラントは、腕に捕まえた彼女を宥めるようにキスを落としながら、そうルリに向かつて穏やかな声で言った。

先に宰相執務室に寄つてきたらしい大公爵夫妻は、弟クロヴィスの様子に何やら思つところがあつたのだろう。

恐れ多くも先帝陛下からの問いかけに、ルリは言葉に詰まった。さらには、彼の腕に抱え込まれた愛らしい大公爵夫人と、その場にいた姉侍女全員の視線が、ぐっとルリに迫る。

握りしめた掌に汗を滲ませ、困ったようにルリが視線を下げた瞬間、また新たな場所から声がかかつた。

「それは、私も知りたいですね」

カツリ？？と音を響かせて、後宮の調理場に足を踏み入れたのは、今まさに話題となっていた宰相執務室の主。

「……クロ、ヴィス様……」

いつになく硬い顔をした宰相クロ、ヴィス・オル・リュネブルク公爵は、カツカツと鋭い靴音を響かせてルリに近づくと、俯く彼女の正面に立つた。

瑠璃とトライータイム（後）

「ルリ」

「……」

床を見つめるルリの視線に、クロヴィスのよく磨かれた黒い靴の先端がうつる。

頭の上から降ってきた彼女を呼ぶ声は、いつもよりもビリビリが冷たく強張って聞こえた。

顔を上げるのが恐ろしく、ルリはぎゅっと唇を噛んだまま身体を縮こませる。

そんな彼女を庇つように、横から口を挟んだのはスミレだった。

「クロちゃんが女関係ちゃんとしないから、ルリさんがいじめられたんじゃないの？ 胸に手を当てて、よーく思い出してみなつ」

「はあ、まあ、確かに。褒められるような付き合い方をしてきたかと聞かれれば、何とも答え辛いですが……少なくとも、後々悔恨が残るような別れ方はしていませんよ。執務室付きの侍女とは、絶対にそういう関係にならないようにしていますし、公私混同するような馬鹿を雇つた気もないんですがね」

「クロちゃんにその気がなくても、侍女さんはクロちゃんにお熱だつたかもしれないじゃない？ 女は怖いのよー」

ぐどいようだが、スミレは現在ドーラの多大な影響を受けている。そんな彼女の言葉を聞いて、縮こまつたルリの前に仁王立ちしたまま、クロヴィスは「ふむ」と顎に手をやった。

「嫉妬をして、年下の侍女に嫌がらせをするようなつまらない者なら、うちの執務室にはいらないですね。本当にそんなことがあつたのなら、その者を割り出して排除せねばなりません」

「……」

「でもね、あなたは理不尽な悪意を向けられたくらいで、へこたれたり引きこもつたりするような意氣地なしじゃない。 そうでもしょう、ルリ」

「……クロヴィス様」

そう言つたクロヴィスの声は穏やかで、ルリは思わず顔を上げて彼を見た。
ルリを真っ直ぐに見下ろす碧眼に責める色はなく、少しほっとする。

「あなたはその生い立ちゆえに、昔から心ない言葉ややつかみにさらされてきたでしょう。それでも、いじけることも潰されることはなく、まっすぐに前を向いて歩いてきたではありませんか」

クロヴィスの言葉に、ルリはドキリとした。

先帝によつて罪人として処刑された侯爵の庶子であるルリは、母とともに皇太后陛下に救われ後宮に住まう事を許されたが、やはり当時はそれを贔屓であるとやつかむ輩も、父侯爵の罪を持ち出し糾弾したがる者たちもいた。

“ 罪人の子 ”

“ 没落貴族の妾 ”

様々な陰口が、皇太后陛下の耳を盗んで母子に降り掛かった。
母はぎゅっと唇を噛んでそれに耐え、必死でルリの耳を塞ごうとした

したが、物心ついた娘には自分の置かれた立場がよく分かつていて。辛くなかったといえば、嘘になる。

けれど

「だって、ルリさんが何か悪いことしたんじゃないんだもん。堂々としてなくちやだよ。子供の罪は親にも責任があるかもだけど、親の罪は子供に何にも責任を押し付けちゃ駄目なんだよっ！」

「スミレ様つ……」

「もちろん子供も、親に罪を被らせないよう、しつかりしなきゃいけないけどね」

やい
お父上の罪は、あなたの罪ではないのよ。堂々としてらっしゃい

かつて、噂を耳にしたらしい皇太后陛下がルリに言つてくれた言葉を、今度は鈴が鳴るような可愛らしい声が再び紡いだ。

ルリの生い立ちについて、スミレは夫であるヴィオラントから聞いたのだろう。

いつの間にかその夫の腕から抜け出していたスミレは、横からぎゅっとルリにしがみつくように抱きついて来た。

思わぬ温かな感触に、ルリはついつい頬を綻ばせ、対するクロッグスは器用に片眉を上げた。

「そう、その通りです。己の生い立ちを恥じることも悔やむことも必要ない。ちゃんとそれを理解していたルリは、けして奴らの悪意に屈しなかった。だからこそ、今回ももしも私に関わる何者かが彼女をやつかんだとしても、それだけで私を見限るようなことはないと思つていました」

「みつ、見限るだなんてつ……！」

「では、何故です。お茶の時間に呼んでも来て下さらない。仕事が

終わった時間に訪ねれば居留守を使つ。何か、あなたの気に触るようなことがありましたか？」

「いえ……あの……そんな……」

次々と畳み掛けるクロヴィスの気迫に押されまくつて、ルリはたじたじとして言葉も出ない。

そんな二人を見比べて、ルリに貼り付いていたスミレが再び口を挟んだ。

「ちょっと落ち着きなよ、クロちゃん。鼻息荒いよ、興奮し過ぎだよ。あと、そんな高い位置から見下ろされて詰め寄られたら、ルリさんの纖細な心臓によくないから、しゃがみなよ」

「……これで、いいですか」

「うわっ、ホントにしゃがんだ。素直なクロちゃんとか、気持ちわるう……」

「「つむさ」ですよ、義姉上様。私もいろいろと必死のですから、温かく見守つてくださいよ」

スミレに言われた通り長身を折つてしまがみ込み、その場に片膝をついたクロヴィスの懇願に、彼の兄が応えた。

ヴィオラン特は背後から手を伸ばし、ルリに貼り付いていた妻を抱き上げる。

スミレもクロヴィスとルリの仲を邪魔するつもりはないので、「よし、ガンバレ」と一言エールを送ると、夫の腕に身を任せた。クロヴィスは戸惑うルリの両手を取ると、びくりと震えたそれを握りしめた。

「何故、私のところに来て下さらなくなつたのですか？　それを聞かない限り、今日はこの手を離しません」

「あの……」

「正直に書つて下さつて結構です。私と、お茶をするのが嫌になつたといつのなれば……」

「ちつ、違いますっ！ 嫌なんかじやないですっ…！」

伏し目がちにそう言つたクロヴィスを見下ろす形になつたルリは、自分の手を握りしめた彼の手が震えているような気がして、思わず大きな声で叫んでいた。

すると、わずかに赤味を帯びたルリのそれよりもすこと怜悧な青い瞳が、「では何故?」というふうに見上げてきた。

ハリはぐくと言葉に詰まりながらも
やにじと」にでも理由を詰
さないわけにはいかなくなつた。

「あの…… まず、クロヴィス様との縁で、誰かに嫌がらせを受けたといつよつな」とはありません」

「それは、本当ですか？」

「はい、本當です。あと……クロウイス様と一緒に緒するのが嫌になつたなんてことも、絶対にありません。とでも、楽しい時間を過ごさせていただいておりました」

「はい……」

クロヴィスとの時間を楽しいとルリが言つたとたん、彼が本当に嬉しそうに瞳を細めて笑つたので、ルリは胸がドキリとした。二人の後ろで、何だかルリにつられたように頬を赤らめたスマレも、自分を抱くヴィオラントにしがみついてドキドキしている。嫌がらせを受けたわけでも、クロヴィスと会うのが嫌になつたわけでもない。

それでは何故、宰相執務室への出入りを一方的にやめてしまったのか。

そう、もう一度問われたルリは、言い辛そうな様子で口を開いた。

「先日……最後にお邪魔した日ですが、私……慌ててお暇しました
でしょ?」

「ええ、ルドヴィーグに邪魔されたのでしたよね」

宰相と侍女がせっかくいい雰囲気になっていたといつのに、ノックを忘れた皇帝陛下が打ち壊した。

「扉から飛び出したら、そこに宰相室付きの侍女の方がいらっしゃって……」

「確かに、あなたと入れ替わりに侍女が入ってきて、陛下にお茶をいれてくれましたが……彼女が何か?」

「あの……泣いて、いらっしゃったんですね……」

「え……?」

扉を飛び出したルリは、その前にいた侍女に気づかずに打ち当たってしまった。

慌てて頭を下げるルリに対し、彼女は「いいのよ、でも気をつけね」と優しい声で言ってくれた。

けれど、ルリが顔を上げた瞬間、彼女の長い睫毛の上に見つけてしまったのは、涙の痕跡。

ルリがそれを確かめる前に、彼女は顔を背けて扉の向こうに消えて行ってしまった。

「わたし……ずっと思つてたんです。クロヴィス様の侍女でもない自分が、午後のお茶の時間に出しゃばってきて、本来お仕事をなさる侍の方々に嫌な思いをさせてしまつているのではないかと……」

「そんなこと……」

「……クロヴィス様と同じ一緒にできるのが楽しくて、ずっと隠づかないふりをしていたんですね」

「……ルリ」

「でも、あの方の涙を見てしまつて、自分の立場を思い出しました。わたしは、皇太后陛下エリザベス様の侍女です。就業時間中に他の方の元にお邪魔してお茶をいたくだなど、陛下のお許しがあるとはいえ職務怠慢でした。これからは、身分を弁えて行動します」

「ルリ……」

硬い表情でそう宣言したルリに、クロヴィスは困ったような声を上げた。

そんな男に気づかないまま、彼女は「あ、ですが」と続ける。

「お菓子は、失礼でなければまた作らせて下さい。クロヴィス様に食べていただけると、嬉しいんです」

「……」

そう言つて、にこりと笑つたルリを、その前に跪いていた男は感激まつたように抱きしめた。

「クッ、クロヴィス様っ……！？」

「クロちゃん、早まっちゃダメよつ。何、とも、順序よ順序っ！」

抱きしめられたルリは顔を真つ赤にしてわたわたと慌て、一方背後でそれを目の当たりにしたスミレは、自分はヴィオラントと順序も何もかもすつ飛ばし、会つた翌日にベッドインしたことを棚に上げて叫んだ。

「……分かりました。あなたに気を使わせないよう、お茶の時間の度に頻繁に呼びつけるのは控えます。ですが、私のためにお菓子は作ってくれるんですね？」

「は、はい」

「では、もう一つ。あなたにお願いがあります

「……何で？」とこましおう。

二つか交わしたのと同じような会話だと思いつつ、クロヴィスに抱きしめられてドギマギしたまま答えたルリに、彼はにっこりと優しい笑みを浮かべて言った。

「ルリの、次の休みを私にくださー」

「……えつ？」

「あなたと同じ日に、私も一日休みを取ります。一緒に過ごしますよう」

「ええっ……！」

「この前言つたでしょ？ 私は休日を過ぐすのが下手なのです。時間を持て余すと、すぐに仕事のことを考えてしまいます。きつちり休めるように、あなたが側で見張つて下さい」

「……」

「嫌とは言いませんよね ルリ？」

跪いてルリを抱きしめていたはずのクロヴィスはいつの間にか立ち上がり、両腕ですっぽりと彼女を包み込んだまま、そっとその耳元に囁いた。

こんな状態で、否と言える人間がいるなら会つてみたいと、恥ずかしさと緊張で半泣きのルリは心の中で叫ぶ。

「ヴィーさん。弟君の口説き文句について、一言どうぞ」

「強引すぎるるのは如何かと思うが、よく頑張ったのではないかと」

一步後ろで仲良く寄り添つて、彼らを見守っていたレイスウェイク大公爵夫妻はそう言葉を交わし、ルリの姉侍女達は麗しい宰相閣下と少女の恋物語に、乙女のように胸をときめかせていました。

「まあまあ、あなた達。こんなところに集まつて、いつたい何の騒ぎですか？」

そうして、柔らかい声とともに現れたのは、この後宮の主である皇太后陛下エリザベス・ファイア・グラディアトリア。

今さらだが、一同が集まつていたのは、その後宮の一角にある調理場だったのだ。

そんな場所で、自分に仕える一番年若い侍女を抱き竦めている次男坊を見つけた皇太后は、「まつ」と頬を両手で覆つた。

「まあ、クロヴィス。こんな陽の高い内から、なあに？ その子はわたくしの可愛い侍女ですよ。その子に関する事は、親代わりのわたくしを介してからにしてちょうだいな」

「これは、申し訳ありません、義母上。実は今、次の彼女の休みに二人で過ごすことを約束したところなのです。お許しいただけますか？」

「クッ、クロヴィス様っ……！」

にこりと爽やかな笑みを浮かべ、義母たる皇太后陛下にそう講うたクロヴィスに、本当は一人の仲を全力で応援しているエリザベスは心の中でニヤリと笑つた。

「まあ、よろしくつてよ。ですが、ルリを泣かせるようなことがないよう、しつかりエスコートなさいませ」

「もちろんですとも」

そうして、ルリの次の休日は、完璧に宰相閣下によつて押さえられたのであった。

??後日、件の宰相執務室付きの侍女の涙について、詳細が判明した。

彼女はルリが心配したように、よそ者侍女の台頭を憂いていたわけではなかった。

「え……ご主人の浮気、ですか？」

「そうです。既婚者の彼女の名が出て不思議に思つたのですが、本人に確かめて真相が分かりました」

「き、聞いたのですか？ 直接？」

「ルリがあなたの涙を見たらしく、とても心配していましたと告げれば、ひどく恐縮して訳を話してくれましたよ」

ルリが涙を見た女性は、宰相執務室付きの侍女の中でも一番の古株だった。

国政の中核たる宰相の侍女ともなれば、その役目はただのお茶汲みには留まらず、秘書的な仕事も請け負っている。

件の侍女は生家の家格が低く、元々は他の者の侍女として仕えていたが、その手腕を買われて宰相室に引き抜かれた経歴の持ち主である。

クロヴィスに仕え始めた頃には既に結婚していたが、妻の突然の大出世を妬んだ夫とは段々そりが合わなくなり、つい先日はその夫の浮気が判明して、侍女は心を痛めていたのだという。

情緒不安定になつていて、ついつい誰もいないと思つて涙を堪え切れなくなつた時、たまたま扉を開けて飛び出してきたルリに目撃されてしまったのだ。

「今さら田那に未練はないというので、とれる分だけがっぽり慰謝料をとれるよう、丁寧に手配してやりましたよ」

「……そ、そうですか」

「彼女もようやくすつきりしたようで、今後ますます仕事に励んでくれるそうです。頼もしいですね」

「……」

ルリはかの侍女の元夫に、少しだけ申し訳ない気持ちになつた。

「ところど、ルリ」

「はい」

「休みはどうしましょうかね？」

「あの……えっと……」

先日の宣言通り、三日に一度だつたお茶の時間の呼び出しが、五日には一度になつた宰相執務室に、ルリはこの田リンゴのパイを持参でお邪魔していた。

甘酸っぱいリンゴと、ほんのりスパイシーなシナモンが絶妙の逸品は、今日も泣く子も黙る宰相閣下を綻ばせる。

ルリに合わせてクロヴィスが捻り取つた休日は、もう一日後に迫つていた。

優秀な副官をはじめ、文官の部下一同はもちろんのこと、先日二人の仲を邪魔してしまつたことを悔やんでいた皇帝陛下ルドヴィークも、彼らの休日に異議を唱えるはずもない。

また、はいと元気な声を上げて拳手をし、「デバガメしたいと思ひますっ！」と、堂々と宣言したスミレは、その夫であるヴィオラントが何とか説得して抑えてくれるだろつ。

ルリの主人であり、身寄りのない彼女の親代わりを自負する皇太后陛下エリザベスは、王族であり公爵でもあるクロヴィスと並んで歩いてルリが肩身の狭い思いをしないようにと、既に何着も外出着

を用意してやつたそつだ。

姉侍女達も、随分と前から我が事のようにそわそわしている。

そんな周囲の異様な盛り上がりに、正直まだついていけないルリの困惑を深めるように、上機嫌の宰相閣下は笑顔でさらになるとでもないことを言い出した。

「そつだ。我が家に来ますか」

「…………えつ…………」

「義母上に、一日お休みをいただけるように頼んで差し上げますから、泊まっていかれでは？」

「ええつ…………？」

クロヴィスが言つ我が家とは、グラティアトリアの四公爵家の一つ、リュネブルク公爵家のことである。

当然、没落した侯爵家の庶子であるルリにとつては、気軽にお邪魔しますと言えるような場所ではない。

しかし、あわあわと焦つてカッピを取り落としそうになつたルリの手を、さつと支えるように掌で包み込んだクロヴィスは、有無を言わぬ笑顔で告げた。

「そつしましょつ」

「…………」

ルリが彼に「否」と答えられる日が、果たしてやつてくるのであるつか。

それは、ルリ本人にも分からなかつた。

「クロちゃんはね、まずは乙女心とは何たるかから、勉強しないといけないと思うのよ」

「……はい、まあ。勉強は嫌いじゃないですが？」

今日も今日とて、グラディアトリアの宰相クロヴィス・オル・リュネブルクの執務机の上には、処理を待つ書類の山がいくつも出来上がっていた。

いや、失礼　処理の済んだ、書類の山だ。

非常に優秀な宰相閣下は、着々とその日のノルマをこなしていた。そんな処理済みの書類が積まれた机の上を、どんづ！　と、ちっちゃな可愛い拳で叩いてクロヴィスを真正面から睨みつけるのは、彼の兄嫁スミレである。

泣く子も黙ると恐れられる冷徹な宰相閣下と、皇太后陛下付きの一番年若い侍女との仲を取り持つた、まさに恋のキュー・ピットともいえる少女は、この日も宰相執務室の扉を蹴破る勢いで入ってきたかと思うと、第一声が冒頭のセリフだった。

「クロちゃんつてば、ルリさんをいきなり自宅テー^モトに誘つたんだつて？」「

「……おや、それはルリ以外はほんの一部の者しか知らないはずですが、いつたい誰がその話をレイスウェイク邸のあなたの耳に届けたのでしょうか？」

「壁に耳あり障子に目あり”という、二ホンのありがたいことわ

ぞを、君に教えてあげよつ「ひよつ

「なるほど。内緒話というのはもれやすいものだと、注意を呼びかける言葉ですね」

「だいたいあつてる

実際に今回スミレの情報源となつたのは、クロヴィスの祖父だった。

クロヴィスとヴィオラントの生母マジエンタの父親で、前リュネブルク公爵アルヴィース・ティル・リュネブルク。

彼の跡を繼いだ孫のクロヴィスが、なんと突然次の休みに屋敷に女性を招待すると言い出した。

滅多に屋敷に帰らないクロヴィスは、実質屋敷を任せきつている祖父にはルリのことを打ち明け、きちんと筋を通しておくつもりだったのだろう。

それだけでも、如何に彼がルリに対して誠実であろうと努めているかがよく分かる。

当主が今までそれなりに異性との交遊を楽しんでいたことは把握しているが、女性を屋敷に招待したいと言い出したのは初めてだつたので、リュネブルク公爵家それはそれは騒然となつた。

若い女性の客を迎えたことのないアルヴィースは、いつたいどう持て成せばいいのかと頭を悩ませ、結局客人の女性と年の近いスミレに助けを求めてきたのだ。

「アルおじーちゃんまつてば、ほんと可愛いの。何を聞くのかと思つたら、『女の子はいつたい何を食べるのかね?』って

「ああ……おじこわま……」

その時の光景が目に浮かぶよつて、クロヴィスは思わず手で顔を覆つた。

スミレが「おじーちゃんまとおんなじものを食べるよ」と答えると、

アルヴィースは「冗談抜きで驚きをあらわに」し、真顔で「それなのに、どうしてスミレはそんなに小さいんだい？」と聞いてきた。

さらにその後一緒に食事をして、スミレが骨付き肉に豪快に齧り付いた姿を見た時には、“そんなものを食べて大丈夫なのか”、“お腹を壊すのではないか”、“ちゃんと消化できるのかと”、い�いじ心配したものだ。

「本氣で、女の子は野菜とフルーツとケーキで既可以ると思つたのね。夢見過ぎだよね。今はご隠居のおじーちゃんだから天然でも可愛いけど、あの調子で公爵とかいろいろと無理があつたのよく分かる」

政治になどまったく興味のないスミレでもやつ思つたように、大國グラディアトリアの四公爵家の一つであるリュネブルク公爵家は、アルヴィースの代で一度廃れかけた。

結局、一人娘のマジンタを当時の皇帝フリードリヒに嫁がせ、その第一子ヴィオラントが玉座を継いだことで地位を保つたようなものだ。

その後、成人を済ませたクロヴィスに公爵の位を譲り、ようやく馴染めない政治の世界から脱出できたアルヴィースは、屋敷に引っこもつて悠々自適の隠居生活を楽しんでいる。

「ヴィーやクロちゃんと血の繋がりがあるなんて信じられない、ピュアなんだもん」

「それは暗に、我々に純粋さの欠片もないと言いたいのだな、スミ

レ
「だいたいそんな感じ」

大国を御そうといふ者は、往々にして純粋でばかりはいられないところだ。

「なるほど、おじいさまから事情を聞いたことは分かりました。それで、ルリを心配して私に何とか忠告しに来たわけですか」「違うよ。クロちゃんが心配だから来たんじゃない！ ねえ、ヴィー？」

「そういだな」

やうやく頷き合つた兄夫婦に対し、クロヴィスは「はて？」と首を傾げた。

「でも普通、いつこの場合は女性の方を心配するんじゃないんですか？」

「ルリさんには、皇太后様や侍女のおねーさん達がいっぱいいてるから任せといたらいいし。でも、クロちゃんはまあ、私たちひとつては弟でしょ？ 可愛くないけど」

「一言多いですよ」

「だって、百年に一度あるかないかっていうクロちゃんの春だよ？ もしもヘタこいて失敗しちゃつたらとか思つと、めひめひめひ心配じゃないつ！ ねえ、ヴィー？」

「そうだな。この度の相手は、クロヴィスの今までの相手とはだいぶ毛色が違うようだから、対応を誤れば取り返しのつかないことになるやもしれん。ここは一つ、彼女と年の近いスマレの意見を参考にした方がいいのではないか？」

「もう……兄上まで……」

クロヴィスは困ったようにため息をつきつつ、兄とその妻にお茶を入れるべくようやく椅子から腰を上げた。

二人にソファを勧め、彼らが座ったのを見届け背中を向けたクロヴィスに、いつもより少しだけ硬い少女の声がかかった。

「クロちゃんさわあ、あわよくば今回のおホートで、ルリさんをものにしあやねうとか思つてゐでしょ」

それに対し、クロヴィスは手元は茶葉を扱いながら、笑みを浮かべた顔だけ振り向かせて答えた。

「ふふふ、お言葉ですが、ルリは既に私のものです。この私が、目を付けた相手を今さら誰かに譲つてやると思ひますか？」

「思はない。クロちゃんに見初められた時点でもうルリさんはご愁傷様としか言つてようがなにかど、今言つたいのはそういう事ではなくて……」

「ふむ、ではビーハーハーハー、まつせつとおひしゃー」

そんなクロヴィスの言葉にむつと口を尖らせたスミレは、隣に座つたヴィオラントにさめうつとしがみつき、わざとらしく泣きまねをして彼に言つつけた。

「ヴィー、クロちゃんが私ヒツイな」とを言わせつとさるー

「それはいけない」

相変わらず表情のない美貌を、けれどスミレにだけは柔らかく緩めて、ヴィオラントは彼女の髪をよじりと撫でながら、クロヴィスに向かつて口を開いた。

「これじゃ、スミレがそなたに“乙女心の何たるかを勉強しろ”といつ理由だぞ、クロヴィス。乙女心というのは我々男には到底理解できぬほど複雑で、鋼のよじて見えて纖細なのだ」

「はあ、面倒くさいですね」

「だが、愛しい娘相手となれば、その面倒さえ愛おしいのだ。そなたに、それを受け止めるだけの器と覚悟はあるのか?」

「……」

ヴィオラントにそう言われ、クロヴィスは一瞬口を噤んだ。
自分も、そして兄ヴィオラントも、これまで女性に対して深い想
いなど抱いたことがなかったように思う。

兄は皇帝という立場上、その権力と美貌にたかる女達に多くを望
みはしなかったし、許しもしなかった。

同じく、皇族であり宰相という皇帝に次ぐ地位に就いたクロヴィ
スも然り。

けれど？？兄は、スミレという存在を見つけて変わった。
彼女を全力で愛し、彼女のためには如何なる面倒ごとも厭わず、
その凝り固まっていたはずの無表情さえ動かして見せた。
兄にとつてのスミレが唯一無二の存在であることは、クロヴィス
から見ても疑いようもない。

では、自分にとつてのルリが、兄にとつてのスミレに匹敵するの
かと問われれば、すぐには答えることはできない。

何故なら、クロヴィスにとつても、何もかもが初めてのことな
だ。

リュネブルク公爵として、彼女が己の相手にふさわしいかと問わ
れれば、否と答えるだろう。

廃された侯爵家の庶子であり、今はただの侍女でしかないルリを
迎えたところで、リュネブルク家が得るものは何もない。

あるいは、結婚を前提としない付き合いであるとしても、まだ少
女ともいえる年齢の人生経験の浅い彼女との戯れに、クロヴィスが
面白みを感じることはまあ無いだろう。

それでも

「……受け止めてみせますよ。面倒などと思つなら、はじめから彼
女に拘つたりしなかつたでしょうしね」

そう答えたクロヴィスに、ヴィオラントは少し厳しい目をして、せらりと問うた。

「今までの、後腐れのない女達とはわけが違うぞ。屋敷に泊めて、公爵の手付きと知れ渡ることになるルリの今後を、そなたは責任を持つて守れると言えるのか？」

「もちろんです。そうでなくば、屋敷に招待したりしません」

それに對し、クロヴィスがきつぱりと即座に答えると、ヴィオラントは幾らかほっとしたように眦を緩め、「そりゃ、なりばよ」と穏やかに告げた。

「しかし、10年になって、女絡みで兄上に心配される」とになるとは思いませんでした……」

「許せ。幾つになろうとも、そなたは私の弟に変わりない。余計な世話と知りつつも、心配してしまつのはどうにもならん」

「はあ、まあ、嫌じやないんですね。ちょっと……照れくさいだけで」

「そりゃ」「はい」

そんな兄弟のやりとりを、スミレは黙つて夫の脇にペタリとくつ付いて見守っていた。

ヴィオラントは、そんな彼女の肩を抱くようにして撫でていった。

「スミレも、これでいいな？」
「うん」

「くくりと頷いたスミレから、ヴィオラントに対する全面の信頼がうかがえる。

ものの例えではなく、文字通り本当に生きる世界を越えて嫁いだ彼女には、今まで常人には計り知れないほどの戸惑いや不安があったのだろうが、それを全て受け止め包み込んで笑顔に変えたのはヴィオラントであろう。

クロヴィスは、そんな兄夫婦の仲睦まじい様子を穏やかな気持ちで眺めながら、では自分には何ができるだろうと考えた。

ルリとの関係は、まだ始まつたばかりだ。

いや、よくよく思い返してみれば、クロヴィスは彼女に対する自分の想いを、言葉としてはまだ一言も告げてはいなかつた。それどころか、自分でどうしてルリにこんなに拘つてしまつのが、正直なところ不思議で仕方がない。

皇太后陛下の侍女であり、先帝に肅清された一族の娘として、ルリという存在は以前から把握していた。

今から十一年前？？クロヴィスが師事していた当時の宰相シュタイアーパ爵は皇太后エリザベスの実兄であり、彼がルリ達母子を側に召し抱えると告げた妹に反対したことを憶えている。

彼女達は、当時の皇帝ヴィオラントをはじめ、皇族に恨みや敵意を抱く可能性のある不穏分子として、警戒されても仕方のない身の上であつた。

結局、皇太后陛下の必死の嘆願にシュタイアーパ爵は折れ、めでたく後宮に居場所を与えた母娘はその恩を忘れず、どれほど陰口を叩かれようとも自暴自棄になることもなく、懸命に主に仕えた。皇太后とは血の繋がりこそないものの、実の子と変わらぬ愛情を注いでもらえたと自覚しているクロヴィスにとって、彼女は紛れもなく大切な母である。

その母が面倒を見ている一番年若い侍女であり、また複雑な境遇にもめげずにいきいきと生きるルリには好感が持てた。

しかし、ただそれだけの存在だったはずのルリが、あの日たまたま王宮の庭でスミレに出くわし、執務室の窓から顔を出したクロヴィスの目に映つた。

そんな思わず偶然が一人を近い距離で引き合わせ、いつのまにかクロヴィスの中でルリは特別な存在へと伸し上がって行ったのだ。けれど肝心のルリの方が、彼のことをどう思つていいのか 分の想いさえ伝えていないクロヴィスには知る由もない。つまり、クロヴィスとルリの関係は、まだ何も始まってさえいないのだ。

そう思い至ったクロヴィスは、ふっとため息をついて「まいりましたね」と呟いた。

「どうしたの、クロちゃん？」

「はい。実を語ると、今までどなたかと真剣にお付き合いをしたことがないので、まず最初になんと言つて告白すべきか分からぬのですが」

「何を今さらつ！ 告白もなしに、いきなりルリさんを家に誘つたの？」

「順序を間違えましたが、頷かせてしまえばこっちのものかと思つて。けれどせつかくなので、参考までに教えていただきたいですが、兄上は何と言つてスミレを口説いたのですか？」

おそらく兄ヴィオラントも、スミレに会つまで誰かを口説くななどという経験はなかつただろう。

美しく尊い彼には、黙つても女の方から寄つて来て、全てを差し出してきたのだから。

今のクロヴィスと同じように、初めての感情に突き動かされた兄は、いつたい何と言つてこの不思議な少女の心を手に入れたのだろうか。非常に興味深いところであつた。

といふが……

「……」

クロヴィスの言葉を聞いたヴィオラントとスミンセ、「えつ？」
と言葉に詰まつたかと思つと、互いに顔を見合わせてしまつた。

そして

「ないよね、そんなの」「
「そういえば、そうだな」

彼らはお揃いの紫の瞳を瞬いて、なんでもないことにそり
のたまつた。

「していうなら、シュタイアーハー公爵の前で結婚しようとしたこ
とが、最初の告白になるのだろうか」

「え……それは、つまり。がつたり身体の関係も済んだ後つてこ
とじやないです。しかも、まず口にしたのが“結婚”つて……い
きなり飛躍すぎじゃありません？ 誰ですか、私に順序を大切に

しろとか説教を垂れたのは。ねえ、義姉上さま？」

「臨機応変っていう素敵な言葉も教えておいてあげるよ」

「都合のいい言葉ですね。もう……まったく参考にならないじゃな
いですか」

クロヴィスはそう言って、呆れたようにため息をついた。

「ルリ、そろそろ焼けそつよ」

「あ、はい。ありがとうございます」

自室にこもっていたルリにそう声をかけてくれたのは、後宮の調理場に出入りする侍女の人だ。

未成年の見習いの者を除けば、皇太后付きの侍女ではルリが一番年下で、他の侍女達は全員先輩にあたる。

朝早く起き出したルリはこの日、特別に調理場のオーブンを一つ借り切ることを許された。

そうして作っていたのは、手みやげにするためのケーキである。焼き上がりまでの時間に、彼女はもう一度自分の荷物をまとめ直していたのだった。

ルリはまだ、本当は自分は夢でも見ているのではないかと思つてゐる。

そうやってついつい現実逃避をしてしまいたくなるほど、ここ数週間でルリの生活はめまぐるしく変化した。

あの日 街への使いの帰り道、たまたま近道を思い立つたことで、彼女の運命の歯車は突然大きく回り始めたのだ。

クロヴィス・オル・リュネブルク。

大国グラディアトリア宰相にして、四公爵の一人。

現皇帝ルドヴィーケの兄であり、前皇帝ヴィオラントの弟。

そして、ルリが最も敬愛する主人、エリザベス皇后陛下にとつても、血の繋がらない息子の一人。

そんな、ルリにとつてはまさに雲の上のような存在であるクロヴィスの屋敷に、彼女は今日明日と招待されているのだ。

四角く頑丈なトランクには、ルリの意に反してたくさんの物が詰められた。

皇太后陛下からは、せつかくの機会だからと何着も衣服が贈られ、ルリが今着ている訪問着も彼女からいただいたものだ。

姉侍女達からも、それお気に入りの装飾品や化粧品など、たくさんの中身が集まつた。

そして、一日ほど前にひょっこりと顔を出した少女からは、何だかとても綺麗な紙の袋をいただいた。

彼女　　スミレは、ルリとクロヴィスが親密になるきっかけを作った人物で、偉大な先帝陛下に溺愛される奥方ながら、実に親しみやすい愛らしいひとである。

彼女にもらつた紙袋の中身は、「サプライズだから、直前に開けてね」との言葉に従つて、まだ確かめてはいない。

ルリはこの後、執務室で用事を済ませてから迎えに行くと伝言をよこしたクロヴィスに連れられ、リュネブルク邸に向かうことになつてゐる。

彼を待つてゐる今の状態が、スミレの言つ“直前”にあたるのではないかと思い、ルリは少しワクワクしながらその封を開いた。

袋の中には、柔らかで上質な手触りの布が、綺麗に折り畳んで入つていた。

生地が透けているので、イブニングドレスを着た時などに肩に羽織るような、大判のストールではなかろうかと検討をつけ、ルリはそつとそれを袋の中から取り出した。

その時、細い紐でできた輪つかが指に引っ掛けたり、「あら、これは何かしら?」と、二つあつたそれを両手に持つて掲げ、生地を広げて見た。

すると

「おや、それは何ですか? ルリ

「えつ……？」

いつの間に入ってきたのか、ルリのすぐ真後ろから聞き覚えのある声がかかった。

びっくりと驚いたルリが慌てて振り向くと、案の上宰相クロヴィスが背後に立っていた。

かつちりとした外出着を着込んだ彼は、実に洗練された立派な紳士で、子供っぽさの抜けきらない自分を自覚しているルリにとつては、ひどく遠い存在に思えた。

しかし、そんな思いを知つて知らずか、クロヴィスは突然長身を折り曲げてルリの耳元に顔を近づけたかと思うと、甘く艶っぽい声で囁いた。

「驚きました。あなたは意外に大胆だ。今夜……私のためにそれを着て下さるうと？」

「あ、えつ？　ひやつ……！　！」

耳にかかる吐息に顔を真っ赤にしたルリは、クロヴィスの言葉に不思議そうに首を傾げ、それから彼の視線を追つて自分の手元を見ると、飛び上がった。

手触りのいい大判のストールだとばかり思い込んでいた物は、実は透けた白い生地のベビードールだった。

つまり、相当色っぽい感じのランジェリーだったのだ。

それを認識したとたん、ただでさえ赤くなっていたルリは、湯気が出そうなほど耳まで真っ赤に染まつた。

「ちつ、違いますっ！　これは私のものではなくて！　そのつ、あのつ……」

慌ててベビードールを胸に抱きしめ、クロヴィスの視線からそれ

を隠したルリは、彼を見上げて言い訳しようと躍起になつたが、上手く言葉が見つからずじどうもどろ。

ついには混乱して、その名の「ごとく瑠璃色の瞳をつむつむとせ始めた彼女に、クロヴィスは苦笑を返す。

「失礼しました、冗談ですよ」

ケロヴィス様上

「どうせそれをぬけしたのは、私のちこちやな義姉上あたりでしょ」

一
あの

あの方のヤリそこなことだ

クロヴィスはそう言ひと、優しい仕草でルリの手からベビードールを取り上げ、さすとそれを器用に置む。

そして

「あつ、あのつ……？」
「はい？」

戸惑うルリに眩しいほどに笑顔を返しながら、当たり前のようにそれを彼女のトランクの中に詰め込んだ。

(も、持つていかなくちゃ いけないんだ……あれ……)

そうして、スケスケ下着の衝撃からいまだ立ち直れていないルリをよそに、中身がいっぱい詰まつたトランクをひょいと持ち上げると、クロヴィスは彼女を振り返つた。

「では、行きましょうか。ルリ」

そこでようやく我に返ったルリは、大切なことを思い出した。

扉に向かつて歩き始めたクロヴィスを呼び止めようと、思わず手を伸ばして彼の袖をきゅっと掴んだ。

しかし、すぐさま無礼に気づいて、慌ててその手を引っ込める。

「しつ、失礼しましたっ！」

「いいんですよ、あなたなら。それで、どうかしましたか？」

「あの……」

「ああ 分かりました」

すると、緊張でいまだすらすらと言葉の出ないルリに何を思ったのか、勝手に一人で納得したように頷いたクロヴィスは、トランクを持つていな方の手で彼女の手を掴んだ。

「 つ！？」

「手を繋いでほしいのでしたら、遠慮せずにそのままおっしゃい。まつたく、可愛いですねえ」

「ちがつ！ ちがちがちがつ……」

「血なんて出でませんよ。大丈夫、柔らかくてすべすべとした、白魚のような手だ」

「ちがうんです～！」

ルリと手を繋いだクロヴィスは、柔らかくて小さなそれを大事そうにそつと握ると、ひどく満足げに微笑んで歩き始めた。

その後、ケーキを焼いていることを何とか伝えたルリだったが、何故か繋いだ手を放してはもらえず、彼に手を引かれたまま自室から調理場まで移動した。

もちろん、通ってきた後宮の回廊には先輩侍女達の目もたくさんあって、自分達に集まる視線にルリはもう縮こまるしかない。

一方、鼻歌でも歌いそうなほど上機嫌な宰相閣下は、滅多に足を

踏み入れることのない後宮の調理場に到着すると、もの珍しそうに辺りを見回していたが、ようやく手を放してもらえたルリがオープンに駆け寄ると、ゆづくとその後を追つた。

「おや、いいにおいですね。何のケーキですか？」

「ジンジャーと、キンカンという果実のマーマレードを入れたケーキです。」

「キンカン？」

「あの……先日、スミレ様にいただきました。お国の柑橘類の一種で、皮(?)とマーマレードにして食べられると」

そう言つて、スミレがさつきのベビードールと一緒に渡したのは、小さな小さな可愛らしいオレンジの赤ちゃんのような果実だった。

金柑は生食もできるし、果皮のついたまま甘く煮ても美味しく食べられ、喉の痛みや咳に効果があるといわれる民間薬としても知られているらしい。

グラディアトリアでは見たことのない種類だが、植物に造詣の深いレイスウェイク大公爵が、奥方に請われて屋敷の庭園で栽培しているのだといつ。

「今日の義母上のお茶請けですか？」

「いえ、あの……、リュネブルク家の皆様に、お持ちしようつかと思つて……」

「我が家に？」

「は、はい……」

焼き上がったばかりのケーキを型から抜くと、ルリは残してあつた金柑のマーマレードをその表面に塗つた。

すると、光沢が出て艶やかになり、実際に美味しいそうな姿に仕上がりつた。

「私、どんなものをお持ちしたらいいのか分からなくて……」

手慣れた様子でケーキをそっと箱に詰めながらそう言つるりに対し、そんなに気を使う必要はなかつたのにとクロヴィスは思ったが、それではルリ自身が納得いかないようだつた。

「私が唯一褒めていただけのは、お菓子作りだけです。だから、お口に合うかどうかは分かりませんが、心を込めてお菓子を作つてお持ちするのが、一番私らしい手みやげになるのではないかと思いました」

まだほかほか湯気を残すケーキは、湿気がこもらないように気を配りつつ、箱の上から薄い布で柔らかく包んだ。

そんな様子を黙つて眺めていたクロヴィスに、ルリは少し不安になつた。

「あの……失礼でしようか？」

「うん？ 何がですか？」

「料理人でもない私が、お菓子を手作りしてお持ちするなんて……」

よくよく考えてみたら、突然屋敷を訪れたよその侍女の手作りしたものなど、口にするのは気持ちが悪いかもしない。

皇太后陛下たちは喜んで食べてくれるが、それは彼女達が幼い頃からルリを知つてくれているからであつて、クロヴィスやスミレのようにパクパク食べてくれる人の方が珍しいのではなかろうか。

そう思うとひどく不安になつて、つい足元に視線を落としそうになつたルリだったが、大きな掌に包まれていた手がぎゅっと握られ、はつとなつた。

ケーキの箱を持ったルリは、再びトランクを下げるクロヴィスに

手を引かれて後宮を出て、表に待たせてある馬車に向かっているところだった。

もちろん、その前には皇太后陛下の私室に顔を出して、一人仲良く暇の許しを得てきていた。

「失礼なことなんて何もないですよ。あなたのお菓子がおいしいのは、私もよく知っています。プロが作ったものにもまったく負けをとりません。自信を持ちなさい」

「あ、ありがとうございます……」

「それにね、どんな素晴らしい物を金を出して揃えたとしても、心を込めて手作された贈り物に敵うはずがないんですよ」

ルリの手を包む温もりは、たおやかだった母のそれとは違ひ力強く、それでいて母に負けないほど優しかった。

同じように優しい声が、顔を上げたルリの上にさらさらと降り注ぎ、その向こうには柔らかい笑みをたたえたクロヴィスの顔。

細いフレームの眼鏡の奥のいつもは怜悧な瞳を細め、愛おしげにルリを見下ろしていた。

ルリは、先ほどの恥ずかしさとはまた別の熱が、己の頬に集まるのを感じた。

「祖父も、あなたが来るのをとても楽しみにしているようです。その手作りのケーキを見たら、きっと喜びますよ。着いたらお茶にして、一緒にいただきましょう」

「はい、クロヴィス様」

そうして、待たせてあつた馬車に乗り込んだ一人は、一路リュネブルク公爵邸に向かつて出発した。

ルリの膝の上に大事に抱かれたケーキは、道中箱の蓋を少しだけ開けて湿気を逃がし、目的地に着く頃にはいい具合に冷めて、味も

馴染んで食べじるとなっていた。

からからと、石畳の街道の上を車輪の回転する音がする。午後を過ぎた街の喧噪は、窓を閉めたリュネブルク家の馬車の中までは、わずかに届くのみ。

流れいく車窓の景色をぼんやりと眺めながら、ルリはかすかな既視感にとらわれていた。

ルリが馬車に最後に乗ったのは、いつのことだつただろうか。父侯爵が処刑されたのは、彼女が六歳の頃だつた。

それまでは、母とルリは城下街の一角に屋敷を与えられて住んでいたが、婚外の妻子である一人が侯爵の屋敷を訪ねられるはずもなく、時々彼が会いにやつてくるのをただひたすら待つばかりの生活だつた。

だから、裕福だった頃も母と馬車で出掛けた思い出など数えるほどしかない。

さらに、父が亡くなつて財産を没収され、皇太后陛下のお側に寄せいただいてからも、母は心労からか体調を崩すことが多くなつて外出することがまつたくなくなつた。

ルリもまた、外に出て買い物や散策を楽しむよりも、部屋で静かに本を読んでいる方が好きだつたので、私用で街に出たことなどなかつた。

そうして考えてみれば、ルリが最後に馬車に乗ったのは、屋敷を引き払つて王城に向かう時だつたと思い至つた。

哀れで無力な母子を助けるために、優しい皇太后陛下がよこして下さつた馬車に、あの時のルリもこうして座つて車窓の景色を田で追つていた。

ルリは幼かつたから、その時のこと全部はっきりと憶えている

わけではない。

ただ、おぼろげな記憶しかない父は死に、それを知られた日からずっと泣いている母が、その時もまだ向かいの席で涙を流していたことだけは、鮮明に憶えている。

あの時の母の涙は、やはりまだ父を想つてのものだったのだろうか。

それとも、お優しい皇太后陛下のお心遣いに対する感謝の涙だったのだろうか。

母が亡くなつた今となつては、それを確かめる術は残されていないが、どちらにしろ、漠然とした不安がその時ルリの幼い心中に深く根付いたことだけは確かだつた。

本当は、ルリも怖くて泣きたかった。

それでもルリは、泣くばかりの母を笑顔で励まし、陰口に唇を噛んで耐え、自分がこれからどうなつてしまふのかも分からぬ不安を胸に押し込めた。

やがて母は亡くなり、ルリは成人して正式に皇太后陛下の侍女になつた。

その頃には、もう彼女の生い立ちを持ち出して貶めようという輩は消え、優しい主人と頼もしい姉侍女達との毎日は、ルリにとっては随分と心地よいものとなつていた。

しかし、そうして穏やかに過ごしている時に限つて、かつて抱いた漠然とした不安が頭をもたげてくる。

母方の親族は健在だが、汚職で処刑された父侯爵と関わるのを嫌つて、ずっと昔に縁を切られてしまつていて。

母を亡くしたルリには、もう家族はどこにもいないのだ。

もちろん、親代わりに後見して下さる皇太后陛下の存在は大きいが、国母ともいえる彼女を家族と思えるほどの度胸はルリにはない。

そうして、こんなにいろいろと皆が良くしてくれるというのに申し訳ないと思いつつも、時々どうしても寂しくて仕方のない時がある。

遠慮なく身を委ね、甘えを許して包み込んでくれる“家族”が、恋しくて恋しくて堪らない時があるのだ。

「何を、考えているのですか？」
「え……？」

突然声をかけられて、ルリははつと我に返った。

向かいの席から、柔らかな瞳で彼女を見守ってくれていたのは、この馬車の持ち主であり、これからルリが訪問することになつてゐるリュネブルク公爵家の当主クロヴィスだ。

一介の侍女にとつては雲の上の存在ともいえる宰相閣下と一人きりで馬車に乗つているというのに、ついつい物思いに耽つてしまつた自分の無礼を、ルリは思いつきり恥じた。

「し、失礼いたしましたっ！」
「いいんですよ、楽にしていて下さって。ただ、最初は楽しそうに外を眺めていたのに、途中から急に表情がなくなつたので、気になりましたね」
「えつ……？」

ルリは元々口数の多い方ではないし、クロヴィスも宰相という職業柄口は達者だがおしゃべり好きというわけではない。

まだそうそう砕けた仲でもない一人が馬車に乗り込んで、普通ならば沈黙が重苦しく感じたりするものだ。

しかし、クロヴィスとルリは波長が合つといふか、意外にも言葉のない二人つきりの空間は心地よく、その安心感がルリを過去の記憶へと誘つたのだろう。

ただ、辿り着いた記憶は楽しいものではなく、ルリは己の心の奥に潜む寂しさと思い掛けず対峙することとなつた。

それから自分を守るために、一瞬全ての感情に蓋をした。

それを、クロヴィスには見られていたようだ。

「あなたも、かつての私の兄と一緒にですね。己の思いを閉じ込めようとする時、表情を消してしまつ」

「私は……」

「いいんですよ。それを、今すぐ無理矢理暴こうとは思つていません。ただ、せつかく一緒にいる時間を手に入れたんですから、の方を向いてみませんか？」

クロヴィスの言葉に、ルリは不思議そうな視線を返した。

そういう風に、彼を媚も打算も匂わせない無垢な視線で見つめる女は稀であつて、そこがまたクロヴィスがルリを気に入る要因にもなつたのだということは、彼女は知らないだろう。

そもそも自分が天下の宰相閣下の馬車に乗せられて、過去の恋人の誰ひとり立ち入ることを許されなかつたりュネブルク家に招待されることの意味を、ルリは身に余る光栄と恐縮するばかりで深くは考えていないだろう。

まだそれほど多く互いのことを知つてゐるわけではないのだから、それは仕方のないことなのかもしない。

そう思つたクロヴィスは、向かいの席から手を伸ばして、ルリの膝の上に大事に抱かれていたケーキの箱を座席に移動させると、あつ、とそれを追おうとした彼女の小さな手を捕まえた。

「ねえ、ルリ。私はね、職業柄あなた自身のことも大体知つているんですよ。変な意味ではなくてね」

「……」

「でも、あなたは私のことをあまり知らないでしょ？ 家族構成と職業以外に、何か知っていますか？」

そう問われると、ルリは黙り込むしかない。

彼はルリの敬愛する皇太后陛下の息子で、この国の宰相で、現皇帝の兄で前皇帝の弟で、それから……

瞳を泳がせる彼女の心の内を読んだのか、クロヴィスは苦笑して

「ほらね？」と言った。

「だから、これからたくさん知つて下さい。私について何か質問はありませんか？ ほくろの数とか、興味あります？」

「それは……ちょっと……」

冗談を織り交ぜつつ、ルリの緊張を解すように語りかけるクロヴィスの声は柔らかく、握られた両手はとても温かかった。

それにほつとどいか安堵したルリは、正面の彼の端正な顔を見上げ、そういえば……とあることを思った。

「あの……」

「はい？」

「実は、眼鏡を外したお顔を、まだ拝見したことがありませんでした」

「おや、そうでしたか？」

クロヴィスは、いつも細いフレームのスマートな眼鏡をかけていて、それがとても似合っている。

しかし今言った通り、ルリはまだ彼の素顔を見たことがなかつたのだ。

それに対して彼は、「いいですよ、『ご覧ください』と答えたかと思つたら、何を思いついたのかにやりと笑つた。

「にこり」ではなく「にやり」であったのは、よく物事に鈍いと言われるルリでも気づいた。

彼女が嫌な予感に思わずつと仰け反ると、クロヴィスは握つていた両手に力を込めて逆に引き寄せてしまう。

そして、再び唇の端を引き上げて言った。

「その代わり、ルリが眼鏡を外すんですよ?」

「えつ……! ?」

「ほら、どうしました? あなたが見たいって言つたんですよ。早く外して下さい」

ん、と顔を突き出して瞳を閉じたクロヴィスに、ルリは何だかとてつもなく恥ずかしい気分になった。

けれど、「ほら早くしなさい」と催促されて、結局ルリは言われた通りにおずおずと彼の眼鏡の縁に指を添える。

そうして、纖細なフレームを壊さないようになると震える指で摘んで引き抜くと、彼の艶やかな金髪をさらりと揺らしてそれが外れた。

「……」

ひどく近く顔を近づけ合つていることも忘れて、ルリは思わず目の前の美貌に見蕩れる。

やがてそつと開かれた瞳は、血の繋がりはないといつたのに、ルリの敬愛する皇太后陛下とそつくりの澄み切つた空のような美しい青であった。

けれど、綺麗 と呟きかけたルリよりも一拍早く、クロヴィスの薄い唇が動いた。

「綺麗な瞳ですね。汚れのない宝石のよつだ」

それが自分の瞳を指しているとは、すぐには気づけなかつたルリがきょとんと首を傾げると、クロヴィスは瞳を細めて微笑んだ。

「どうですか？ 眼鏡の時とは印象が違います？」

「あ、はい、あの……、眼鏡をかけていらっしゃらない方が、お優しいお顔に感じます」

「ほら、そんなもんですか」

「あと……お兄様に、よく似ていらっしゃいます」

そうルリが言つたとおり、髪や瞳の色こそ違うが、やはり母親が同じクロヴィスとヴィオラントの顔の造形はよく似ている。

それを聞いたクロヴィスは、一瞬虚を突かれたような顔をしたが、すぐに「そうですか」と言つて破顔した。

今でも兄を深く敬愛する彼は、ルリの言葉が素直に嬉しかったのだろう。

そんなクロヴィスを見つめ、彼が兄ヴィオラントを含めた家族をとても愛しているのだと再確認する。

それはとても微笑ましいことである。なのに？？

（いやだつ……私……）

とたんに、ルリは天涯孤獨の我が身に愕然とした。

兄も弟も姉も母も、そしてスミレのような新しい家族もいるクロヴィスが、その瞬間とてつもなく羨ましくなった。

しかもただ羨むだけでなく、それは嫉妬のように醜い感情に成り代わるうとし、そう気づいたルリはひどく自分が恐ろしくなつて、それを封じ込めようとした。

クロヴィスに見蕩っていた瞳を伏せ、どす黒い感情が頭をもたげるのを阻止しようと、彼に包まれていた掌を引き抜き胸を抑えようとした。

しかし、それを許さぬ強い力で手を握りしめられたと思ったら、いつの間にか離れていたもう片方の彼の手が、ルリの頸を捕えた。

「？？ルリ

ぐつと顎を掴まれて、俯こうとした顔を無理矢理上に向かされた。それに驚いた声を上げる間もなく、開きかけたルリの唇は何者かによつて塞がれてしまう。

もちろんそうしたのは、クロヴィス以外の何者でもない。

？？ルリにとつては、生まれて初めてのキスであった。

そう彼女が認識する前に、優しく押し付けるだけの唇はそつと離れて行つてしまつたが、おかげで呆然と見上げる形で固まつたルリに、クロヴィスは不敵な笑いをたたえた顔で言つた。

「私の前で、もう感情を押し込めるのはやめなさい。あなたが表情を消す度に、私はそれを阻止します」

「なつ……えつ……？」

「つまり、私の前でしけた面をするよつならば、その度に唇を奪わると覚悟しなさいねつてことですよ」

「なつ……？」

「おぼえておきなさいね」

そうして、ようやくクロヴィスはルリの顎と両手を解放し、眼鏡をかけて何食わぬ顔で座席に座り直した。

もちろんルリは、その後時間差で恥ずかしさが爆発して真っ赤になり、彼はそれを見て「ふふふ」と実に楽しそう。

そんな相手の余裕すぎる態度を恨めしく思いながら、傍らに除けられていたケーキの箱を膝に抱え直し、耳まで真っ赤にしてそれをギューッと抱きしめていたルリは、そこではたとあることに気づいた。

そして突然、水を得た魚のようにぱああつと顔を輝かせると、頬を薔薇色に色付かせたまま声を上げた。

「あのつ、セツキのお話ですがっ！」

「うん？ 何ですか？」

「私がクロヴィス様の、家族構成と職業以外に知っていること、一つありました」

「おやおや、何でしょう？」

そんな少女の様子を、可愛らしいなあと想いながら眺め、クロヴィスは長い脚を組みながら先を促す。するとルリは、膝に抱いたケーキの箱を少しだけ持ち上げて答えた。

「クロヴィス様は、お菓子に目がなくていらっしゃいますー。」

「おや、バレましたか」

その時の、ルリのいやに得意げな顔が面白かったのか、クロヴィスは思わず盛大に噴き出していった。

リュネブルク公爵家の屋敷は、王城を挟んでレイスウェイク家と
ちょうど対極の位置にある。

市街地を過ぎると小さな林に差しかかり、そこはもうかの家の領
地である。

やがて、馬車は大きく立派な門をぐぐり抜けた。

正面にそびえ立つ大きな屋敷は、先々代が建てたものらしいが、
手入れが行き届いていて少しも傷んではない。

屋敷の背後には山が迫り、その昔はたくさんの銀が採れたらしい
が、今はもう発掘はなされていない。

クロヴィスとルリを乗せた馬車は滑るように敷地を走り、玄関の
前で緩やかに停車した。

御者が扉を開くと、クロヴィスはルリの膝のケーキの箱を彼に預
け、自分はさつと馬車から降り立つたかと思うと、ルリに向かって
片手を差し出した。

「おいで、ルリ」

「は、はい……」

屋敷に近づくにつれ、新たに緊張を募らせていたルリを馬車の中
で見守っていたクロヴィスは、彼女を安心させるように柔らかく微
笑みかけ、自分の掌に慎ましく載つた震える手を力強く握つてやつ
た。

そんなクロヴィスの優しさに気づき、ルリは少し安心したようにな
強張つていた頬を緩めた。

と、その時

パンツ！

パンパンパンツ！

パパンツ　！！

「きやつ……！？」

突然、何かが破裂するような大きな音が響いたかと思うと、色とりどりの紙紐と紙ふぶきがクロヴィスとルリの頭上に降り掛かった。とっさに自分の身を盾にして、それがルリに届くのを防いだクロヴィスの視線の先には、にこにことお揃いの笑みを浮かべた見知った顔が並んでいる。

クロヴィスの祖父であり、前リュネブルク公爵アルヴィースをはじめ、この家の住人が全員並んで玄関で出迎えてくれたらしい。

クロヴィスは髪に絡んだカラフルな紙くず達を振り落とすと、義姉スミレが「魔王だ魔王だ」と評する笑みを浮かべて、一番先頭にいた祖父に向かって口を開いた。

「ただ今戻りました、おじいさま。盛大な歓迎をありがとうございます」

「おかげり、クロヴィス」

しかし、いろいろ鈍いと有名なアルヴィースは相変わらずにここしたままで、後ろの使用人達の顔色が冴えなくなつたことも気がつかない。

クロヴィスはそんな一同を舐めるように見回してから、彼ら全員が手に持っている物体に首を傾げて言った。

「それで、これは一体何の真似ですか？」

大人の掌に収まるほどの大さの円錐の物体で、周りにはカラフルな紙が貼られている。

「こちらを向いた円錐の底がポツカリ開いている」ことから、先ほど紙くずどもはその中から飛び出したものだろう。クロヴィスの問いかけに、アルヴィースはよくぞ聞いてくれたとばかりに、笑みを深めて誇らしげに答えた。

「これこそが、スマーレの国における最大の歓迎アイテムなのだそうだ」

「……まあた、あのちびっ子おねえちゃんの仕業ですか……」

「見てご覧、クロヴィス。この後ろの紐を持ってだな、こうして上向きにかまえて……この時の角度が重要らしいのだ。それでだな、あとは一気に紐を引っ張つて」

「分かりました分かりました。面白いおもちゃをもらえてよかったです。でもそれ、中に微量の火薬が入っているようですから、取り扱いには注意して下さいね。あと、人に向かつて打つては駄目です」

「ああ、しまつた！ それはスマーレにも注意されていたことだった。緊張のあまり、すっかり忘れていた！」

つまりそれは、スマーレが実家のある世界から取り寄せた、典型的なパーティグッズであるクラッカーだった。

もちろん、グラディアトリアには存在しない代物である。

わたわたと慌てる祖父を眺めながら、先日スマーレも言つたことだが、この人と自分や兄に血の繋がりがあるなんて時々信じられない……とクロヴィスは思つた。

そんなドジッ子属性を見せた愛すべき祖父アルヴィースは、クロヴィスの後ろでおろおろとしていたルリを見つけると、困ったように眉を八の字にして言つた。

「びっくりさせてしまつてすまなかつたね、お嬢さん」

「あ、いえ、大丈夫です！」

「ではでは、皆の衆。整列！」

そうして、畏まるルリを前に、アルヴィースの号令でリュネブルク家の一同がすらりと並んだ。

ルリはその光景を見て、過去にたつた一度だけ、父侯爵の屋敷に連れていかれた時のことと思い出した。

その時もこうやって、大勢の使用人が玄関で出迎えてくれたと思うが、彼らは人形のような無表情を顔に貼付けて、黙つて頭を下げていた。

そして、父について通り過ぎたルリの背中に突き刺さるのは、“妾の子”という蔑みの視線ばかりで、幼い身でも自分が歓迎されないことがよく分かったものだ。

けれど、今ルリを迎えるのは、過去の記憶とはまったく対照的な視線。

「 ようこそ、リュネブルク家へ！」

ずらりと並んだ全ての顔には柔らかい笑みがのつていて、ルリは本当に自分が歓迎してもらえていたのだと実感した。

「……ね？」緊張して損したでしよう。まったく、どれだけあなたが来るのを楽しみにしていたんでしょうね、うちの連中は……」

クロヴィスはそう苦笑しながら、ルリの背に優しく手を添えて、屋敷の中へと促した。

ところがその時、ふとルリの視線の端に、物陰からこちらを見つめる小さな男の子の姿が映った。

ルリが思わず立ち止ると、クロヴィスは「どうしました？」と

彼女の顔を覗き込んだ。

「あ、あの、男の子が……」

「ああ、紹介しますよ。ロイズ、こちらに来なさい」

「……」

ルリの視線を追つて男の子を見つけたクロヴィスは、手招きをして彼を呼んだ。

すると、男の子は幼さに似合わぬ硬い表情をして、とことことやつてきた。

柔らかそうな明るい茶色の髪とベーゼルの瞳の可愛らしげな子供に、ルリの頬も自然と緩んだ。

「お屋敷の、どなたかのお子さんですか？」

「ええ、私の息子」

「ええっ……ー?」

グラディアトリアの宰相閣下はいまだに未婚である。

まさかの隠し子発言つー? と、ルリはびっくり仰天目を見開いて、クロヴィスを振り仰いだ。

けれどそこにあつたのは、人の悪い笑みを浮かべた美貌。

「 のように可愛がつて いる子供ですよ」

「…………クロヴィス様」

「ふふふ、ルリは期待通りの反応をくれるから楽しいですねえ」

「……」

からかわれたと分かつたルリは、頬をかつと赤らめて恨めしそうにクロヴィスを見上げたが、彼の笑みを深めただけだった。

「ロイズはね、うちで雇っていたメイドが生んだ子供なんですが、母親が去年病で亡くなりましてね。父親も分からず身寄りがないものですから、リュネブルク家で面倒をみる」とになつたんです」

「まあ……」

「しつかりした子で、おじこさまのお仕事にうまいこといんです。

「ロイズ、お客様にご挨拶しなやー」

「……こんにちは」

「ここにちは。はじめまして、ロイズ君。ルンといいます」

クロヴィスに促され、いかにも不承といった様子でロイズはルリに挨拶をした。

ルリが腰を落として田線を合わせ、「おいくつですか?」と問いかけると、また仕方なしにという様子で「……五歳」と小さく答えた。しかし、彼は突如唇を噛んで顔をしかめたと思つたら、ギッとクロヴィスを睨みつけた。

「クロヴィスをまのうせつわ。つきてお帰りの時は、ぼくにチヒスを教えてくださるお約束でしたっ!」

「うん? もちろん、約束を違える気はありませんよ?」

「うそだつ! だつて、女の子とお帰りだものつ! その子とばかり遊ぶ気なんだものつ!」

「ううむ、まあ確かに、ルリと遊ぶ気も満々ですが……」

「ク、クロヴィス様……」

「女の子なんか、女の子なんかつ、だいつきらいだつ……」

「あ いら、ロイズ」

小さなロイズはそう吠えると、クロヴィス達に背を向けて、たつとどこかに走り去つてしまつた。

「やれやれ……おじこさま、ロイズに何かおつしゃいました?」

「クロヴィスの大切な女性がいらっしゃるから、今回は遊んでもらえないよとは言つたよ。一世一代の勝負どころだからね」

「……何の勝負だって言つんですか」

「君がかわいい人を手に入れられるかどうかは、リュネブルク家としても大きな問題だからね。つんつんとプライドが高くて面倒くさい、綺麗なだけの女主人はいらないよ」

そう答えたアルヴィースは、ぱちりとルリに向かつて片目を瞑つてみせる、お茶目な紳士。

彼の淡いブロンドは、光りの加減では先帝陛下の銀髪を彷彿とさせ、優しく細められた瞳の色は宰相閣下と同じ空の色。

年齢を重ねても、確かな血の繋がりを感じさせる端正な顔立ちは、彼の孫達とともによく似た雰囲気だつた。

「さあ、こんなところで立ち話もなんだ。中に入つてお茶にしよう」

そう言つたアルヴィースの言葉に、ルリは手みやげに持つてきたケーキの箱を預けっぱなしであることを思い出した。

慌てて背後を振り向くと、馬車の脇でここにこして見守つていた御者の手にそれなく、いつの間にか隣に立つクロヴィスの片手に移つていた。

ルリの視線を追つてケーキの箱に辿り着いたアルヴィースは、またにこりと笑みを深める。

「スミレがね、君の作るお菓子はとても美味しいから楽しみにしておけって言つてたんだよ」

「そ、そのように、勿体ないお言葉をつ……」

「うちの義姉上は、ああ見てもお世辞は言わないんですよ。私も焼きたてを拝見したので、『馳走になるのが楽しみです』

「ク、クロヴィス様までつ……」

ルリにとつては、菓子作りが唯一自信を持つこと。

せつせとハードルを上げてくれたスミレとクロヴィスをこっそり恨みつつ、ルリは期待に胸を膨らませるアルヴィースに向かって言った。

「お会い出来て光榮です、アルヴィース様」

「こちらこそ、会えて嬉しいよ。よく来てくれたね。??といひで、

クロヴィス

「はい、何でしょう?」

「そろそろ……彼女に名前を聞いてもいいかな?」

アルヴィースにそう言われ、ルリは自己紹介どころかまだ名乗つてさえいなかつた自分の失態に気づいた。

おそらく、クロヴィスやスミレとの話題に上つたルリの名は、彼はすでに知っているに違いない。

それでも、一介の侍女にわざわざ名乗る機会を『与えてくれたのは、彼の気遣いに相違ない。

「し、し、失礼しましたっ!」

「いいんだよ、落ち着いて。では可愛らしいお嬢さん、この爺にも名前を教えてくれるかな?」

爺だなんて……と思いながらも、ルリはスカートを揃んで淑女の礼をして、名乗つた。

「ルリと申します」

皇太后陛下が用意して下さったのは、ルリの瞳を優しく薄めたような淡い色合いのワンドピース。

光沢のある手触りのいい生地に、襟元や袖には纖細なレースが飾られて、一目で上等とわかる代物だ。

ルリ自身も、名のある侯爵に見初められたほどの美しい母譲りの、整った容姿をしている。

髪はありふれた栗毛だが、皇太后陛下は艶やかでとても綺麗だと撫で、深い青の瞳は宝石のようだと大公爵夫人が褒めてくれた。侍女のお仕着せから上質な訪問着に着替えたルリは、どこからどう見ても美しい貴族の令嬢に映つた。

だが、彼女が名乗ったのは、家名も血名も何もない、ただの“ルリ”だった。

それは、罪人として処刑された父とも、母と自分を見捨てた母方の実家とも、完全に決別したのだという、ルリの頑な意思の表れである。

ルリは、愛する母にもらい、敬愛する皇太后陛下に親しまれ、可愛らしい大公爵夫人に素敵と褒められた“ルリ”という名ただ一つで生きていくつもりであった。

“ルリ”以外の何者にもならない？？そう心に決めていた。

仕上げに塗つた金柑のマーマレードで、ケーキの表面は艶やかでいてしつとりとしている。

すつとナイフを入れると、ほのかに香るのはジンジャーとラム酒。ケーキの生地には、ラム酒に砂糖と一緒に漬込んだみじん切りのジンジャーと、もちろんレイスウェイク大公爵家自家製の金柑マーマレードが混ぜ込まれている。

ケーキを切り分けるルリの横では、先ほど彼女とクロヴィスを使用者一同を従えて出迎えた、前リュネブルク公爵アルヴィースが、三つのカップに紅茶を注いでいた。

グラディアトリア四公爵の一人でもあつたアルヴィースだが、彼は昔からこうして自分で紅茶をいれることが多くつた。

かつては妻 クロヴィスとヴィオラントの祖母にも、日常的に振る舞つていたらしい。

クロヴィスが自分でお茶をいれるようになったのも、彼の影響が大きい。

「おいしそうだねえ。それに、とてもいい香りがするね

「ありがとうございます。お口に含えれば光栄です」

皇太后陛下の侍女であるルリの職場は、基本女性ばかりで占められている。

何度かクロヴィスの執務室に出入りするうちに、彼の部下の文官たちとも挨拶程度は交わせるようになつたが、ルリはまだどうこも男性と話すことには慣れない。

特に、アルヴィースのような年齢の男性とは、今まで接する機会がほとんどなかつたので、ルリは最初はやはり緊張していた。

実を言つと、ルリの父はアルヴィースと同年代であった。年をとつてからルリの母を見初めたので、その頃にはすでに正妻との間の子が生んだ孫もいた。

ルリの父の記憶はひどくおぼろげだが、いつも厳しい顔をしていて、抱いてもらつた憶えもないようだ。

一方で、彼女の隣で自分の入れた紅茶に満足そうな壮年の紳士は、端正な顔一面に優しい笑みを浮かべて、それを惜しげなくルリにも向けてくれる。

一瞬、それが父が笑いかけてくれたものと錯覚し、自分の中に亡き父への想いの名残が存在したこと、ルリ自身ひどく驚いた。

ルリが切り分けたケーキは、上等な皿の上に載せられて、ひどく立派になつた氣分だ。

それに、待つてましたとばかりにフォークを入れて、真っ先に口に放り込んだのは、ソファに座つて窓いでいたクロヴィスだつた。

「うん、やはり美味しいですね。甘すぎずとても上品でいい

「ありがとうございます」

「どれどれ」

孫の絶賛に、彼とルリの前に紅茶を置いてやつたアルヴィースもケーキを口に含む。

そうして、「これはほつまい」と盛大に褒めたたえた。

「キンカンという果実は、私もヴィオラントに種を貰つて庭に植えよつと思つてゐるんだ。実が生つたらルリにお菓子にしてもらおう」「気安く彼女を使わないで下さじよ、おじいさま。ルリは皇太后陛下の侍女なのですよ」

ケーキを頬張つてほくほく幸せそうな祖父の言葉に、ルリにお菓子を散々作らせてきた自分を棚に上げたクロヴィイスが苦言を返すと、アルヴィースは「おや？」という風に首を傾げた。

「でも、クロヴィイスの恋人なんだろう？　いづれうちの子になるんだろう？」

「…………！」

さらりと言つてのけたアルヴィースの言葉は、ルリを飛び上がらせるほど驚かせた。

しかし、今まで一度も懇意にしている女性を屋敷に連れてくることも、ましてや身内に紹介することもなかつたクロヴィイスが、二十四の歳にして初めてそれらをなした相手がルリなのだ。

アルヴィースが、彼女を孫の特別な女性　つまり結婚を約束した恋人と思うのも無理はないだろう。

家柄云々に頼着しない前リュネブルク公爵にとつて、ルリは大歓迎の存在だった。

そんな、滅相もない！　とんでもない誤解ですっ！

ところが、そうルリが叫ぶよりも早く、かちやりと紅茶のカップをソーサーに戻した男が口を開いた。

「ああ、そうですね。まったくその通りです」

「…………！」

またクロヴィイスにからかわれているのだと思つたルリは、それはあまりにもお戯れが過ぎると彼を見上げたが、しかし思いがけず真剣な眼差しとかち合うことになつておののいた。

眼鏡の奥の怜俐な瞳はまっすぐにルリを見据え、逸らすことを許さぬ強さであった。

「実はね、何度か義母上にはルリのことをかけあつてみたんですが
ね、なかなか首を縊には振つては下さらないのですよ」

「……え？」

「ほら、ルリは宰相執務室付きの侍女達とも仲良くなつたでしょう。
だからもういつそ、うちの侍女としてあなたを譲つていただけない
かとお願いしてみたんですよ」

「ええつ？」

「誤解なきよろしくおきますが、あなたを物のようにやりとり
するつもりだったのではないですよ？ ルリは義母上の侍女である
前に、彼女の養い子ですからね。保護者に先にお願いするのが筋か
と思って」

「そんなつ……恐れ多いことです！ 私のよつな者が皇太后様の…

「ですが、義母上にはきつぱりと断られてしまひましたよ。ルリを、
よそに働きに出す気はないんですつて」

「本当ですか……？」

「ルリを手放すのは、これぞという相手に嫁にやる時だけだともお
つしゃつてましたよ」

皇太后陛下に母とともにに救われ生かされたルリは、少しでも彼女
に恩返しをしたいと思っている。

クロヴィスから聞かされた主人の言葉に、ルリは胸が熱くなるの
を感じながら、「私も皇太后様以外の方にお仕えする気はありません！
一生お側にお仕えします！」と心の中で返した。

そんなルリの決意を知つてか、クロヴィスは獲物を狙う猛禽類の
ように鋭く瞳を眇め、眼鏡のレンズ越しに彼女を見据えて言つた。

「そういうわけだからね、ルリ。 うちにお嫁において

「つー？」

がちやりと、ルリの手元でカップが大きく音を立てた。

危うく、せっかく先代リュネブルク公がいれて下さった紅茶を零してしまった。どうだつた。

そのアルヴィースは、突然の孫のプロポーズに立ち会つことになつて、「いきなりだね！」とさすがに驚きを隠せない様子。

「こういうことはね、勢いも大事なんですよ。ほら、変に畏まつた方が警戒されるかもしれないじゃないですか。うまく話の流れにのせた方が、ルリもついつい頷いてしまうかもしないでしょ。頷かせてしまえばこっちのもんです」

「これこれ、クロヴィース。腹の中から黒い物が漏れ出しているよ。ちょっとは自重しなさい」

その後、「こういうことはムードが大切なんだよ。せめて二人つきりの時に言うとかだなあ」などなど、アルヴィースはルリのケーキを頬張りながら、懇々とクロヴィースに対して説教を始めたが、もちろん彼に堪えた様子はない。

それどころか怜俐な美貌には不敵な笑みを浮かべ、長い脚を悠然と組み替えて、優雅に紅茶に口を付けつつルリを見据えた。

？？うんと、おっしゃい

クロヴィースの目は、間違ひなくそう齧していた。

と、その時？？

「いやだつ！ そんなの、ダメだよつ……！」

あまりのことに混乱し、パニックに陥りそうになつたルリをはつ

とさせたのは、そんな甲高い子供の叫び声だった。

驚いて扉の方を振り返った彼女の視界に、先ほど玄関から走り去った小さな男の子 ロイズの姿が飛び込んできた。

「こら、ロイズ。扉を開ける前にはノックをなさい」

「クロヴィス様、ひどいよつ！ お嫁さまがいらしたら、もう僕とは遊んでくださらないんでしょう！」

ただでさえ忙しくて、滅多に屋敷に戻らないクロヴィスが“お嫁さま”を迎えるべ、ますますロイズに付き合ってくれる時間が減ると言いたいのだろう。

ロイズはよほど屋敷の主人に懐いているようだ。

そんな彼に、クロヴィスは大真面目に返した。

「そんなことないですよ。昼間ならお相手しますよ、昼間ならね」「どうして夜は駄目なのとか突っ込みたくなる言い方を、五歳の子相手にしちゃダメだよ、クロヴィス」

「おや、これは失敬」

「ちょっとここにおいで、ロイズ。せつかくだから、君も一緒に菓子をいただきなさい」

扉の脇で泣きそうな顔をしていた幼い少年は、アルヴィースに呼ばれて逡巡するように視線を泳がせる。

けれど、ルリと皿が合つと、とたんにぎゅっと眉をしかめて彼女を睨み付けた。

「その人の作ったお菓子なんて、いらないよ……！」

ロイズはそう叫ぶと、再びぐるりと振り返って駆け出して行ってしまった。

「あ？？待つて……っ！」

先ほどは見送ってしまったその背中を、しかしルリは今度は追いかけた。

天涯孤独になってしまった幼い彼に、同じ境遇の自分の幼い頃が重なったのだろうか。

ルリにはそれでも母が一緒だったが、あの年齢でその母さえも亡くしてしまったロイズがひどく哀れに感じた。

同情したいわけではない。

ただ、彼の寂しい背中を見たら、ルリは居ても立ってもいられなくなつたのだ。

「放つておきなさい？？つて……ああ……行つてしましましたね」

そんなルリをとめようとしたクロヴィスだが、躊躇なく部屋を飛び出して行つた彼女の耳に、彼の声は届かなかつた。

「つむ、メモメモ。『一日目、クロヴィス一世一代のプロポーズをロイズの乱入により有耶無耶にされる』、と

「ちょっと、何書いてるんですか。一体何のためですか」

「スマレに依頼されたんだよ。クロヴィスの『おつきあい』データをつぶさに観察して、レポートにまとめて提出するよ」とつけてね

「彼女のデバガメに加担してどうするんです」

「許せクロヴィス。爺は小悪魔に魂を売り渡してしまつたんだよ」

「ちょっと、うまい」と言つたみたいな得意げな顔するの、やめてくださいます？」

クロヴィスは、人の不幸を楽しむ祖父をたしなめながら、ルリが消えたドアを眺めて頬杖をつき、深くため息を吐き出した。

「待つてっ！　ロイズ君、待つて……！」

小さなロイズは、実にすばしつこかつた。

ルリもちょっとは足の早さに自信があったのだが、今日は皇太后陛下にいたいた慣れないハイヒールの靴のせいで、思いつきり走ることができず、ついにロイズの姿を見失ってしまった。

気がつけば、ルリはいつの間にかリュネブルク家の裏庭にまで出てしまっていた。

途中、先ほど玄関で出迎えてくれたこの家の使用人達ともすれ違つたが、夢中でロイズを追いかけていたルリは、彼らに碌に挨拶もできていなかつたことを今さら思い出して、自分の無作法に恥じ入る。

しかも、初めて訪れた屋敷で右も左も分からぬといふのに、ロイズの背中だけ見て走つてしまい、今自分がどこにいるのかさえも知れない。

辺りを見回しても、どうやら裏庭の深くまで入つてしまつたらしく、人の気配がまったくしない。

屋敷の裏手には、リュネブルク公爵家所有の元鉱山がそびえ立ち、裏庭はその山と大きな屋敷に挟まれた状態で、陽の光があまり届かずいさか薄暗い場所だつた。

日当りの加減で、やはりあまり植物の栽培には向かないらしく、表の庭の華やかな印象とはだいぶとかけ離れている。

それでも当代の宰相閣下の邸宅らしく手入れは行き届いていて、足元には芝生の代わりに平らな石が敷き詰められており、慣れない

高いヒールの靴を履いたルリの足元も安定し、歩きやすくなつていた。

とにかく、ロイズを見失つてしまつた以上、ルリは元来た道を戻るしか仕方がないのであるが、踵を返そつとした彼女の視線は、その時ふとある建物を捉えた。

それは日当りの悪い裏庭にありながら、ただ一力所だけ陽の光がさんさんと降り注ぐ場所であつた。

どうやら山の傾斜の角度と、屋敷の屋根の形の関係で、この場所だけは晴れた日ならば一日中日が当たるようになつてゐるらしい。それほど大きくない建物だが、四方を囲むのは透き通つたガラスの壁であり、中には所狭しと大きな葉や太い茎のダイナミックな植物達が茂つているのが見えた。

「……温室、かしら？」

王城の庭にも、かつて高名な庭師ロバート・ウルセルが作った立派な温室が存在し、中では温かい地方原産の鮮やかな花々が育てられていて、ルリの敬愛する皇太后陛下の目を楽しませていた。

初めてお邪魔した邸宅の温室に、断りもなく足を踏み入れるのは少々憚られたが、しかしルリは意を決して入り口の扉を潜つた。何故なら、閉まつていなければ意味のない温室の扉が全開になつていて、しかも中にかすかに人の気配を感じたような気がしたのだ。

「……ロイズ君、いるの？」

豪快に生い茂つた亜熱帯の植物の葉をかき分け、ルリは恐る恐る奥へと進んで行つた。

今度は足元にも植物が茂り、油断しているとヒールが埋もれて転びそうになる。

真上から降り注ぐ太陽の光が温室の中を容赦なく温め、じつとり

と汗ばむほどになっていた。

その時

「 わつ……」

ハンモックになりそうなほど大きな葉の向こうで、小さく驚いた
ような声が聞こえた。

「ロイズ君つー!？」

ルリは慌ててうんしようとそれを持ち上げると、身を屈めて葉の
下を潜り抜ける。

それは彼女の行く手を阻むように幾重にも重なっていて、ルリは
必死に葉を掻き分けて進んだ。

すると田の前に現れたのは、今度は大きくぼっかりと地面に開いた穴であった。

「えつ？ わつ……」

不自然に開いた怪しい穴に、ルリは思わずつと驚いて身を引き
かけたが、先ほど避けた大きな葉が手を放した反動で戻ってきて、
背中を押すようにしてルリを穴の際まで弾き飛ばした。

あわやもう少しで穴に落ちそうといつところで何とか踏みとどまり、ほつと胸を撫で下ろしたルリを、しかしさらにびっくりさせる
展開が待ち受けていた。

なんと、田の前にできた穴から、突如何者かがぬつと現れたので
ある。

「 きやあつー!？」

ルリは思わず悲鳴を上げて後ろに仰け反り、細いヒールがバランスを崩して尻餅をついた。

そして、呆然と目の前に現れた人物を見つめた。

その人物とは、高年の女性であつた。

透けるようなプラチナブロンドの髪を無造作に後ろで一つに束ね、赤味の強いブラウンの瞳の周りには年齢を感じさせる皺をこしらえてはいるが、その容貌は非常に整つていることが窺える。

細身の身体を包むのは土に汚れたシンプルなシャツだったが、それでも彼女の美しさと上品さが損なわれることはない。

それほど、穴からによきつと上半身を生やした女性は、ただものではないオーラを醸し出していた。

彼女は、目の前で腰を抜かしたように地面に尻餅をついたルリを見つけると、につこりと優雅に微笑んでみせた。

たとえ頬に盛大に土をくつ付けていようと、それはまるで女神のごとく美しく神々しい微笑みであり、穴から生えた女神はルリに向かつて凜と響く声で問う。

「そこな娘」

「はつ……はいつ！」

「そなたが落としたのは、この美しい鉱物かい。それともこの珍しい化石かな？」

「あ、あの……」

彼女はそう言つて、右手にガラスのように透き通つた鉱物の塊、左手に何やらぐるぐる模様の石の塊を掲げて、ルリに向かつて首を傾げてみせた。

相手の戸惑つた様子を眺めると、彼女は次に一度穴の中にしゃがんだかと思つたら、今度は石よりもずっと大きなものを持ち上げてルリの前に差し出した。

「 それとも、この元気の有り余つた小僧かしら？」

「 ロリ……ロイズ君つ！？」

穴から半身を出した女性に襟首を摘まれて、ばつの悪そうな顔をしていたのは、ルリが必死で追いかけて探していた小さな男の子、ロイズであった。

「 私が探しているのはその子です、女神様つ！」

「 よりしい。そなたは正直者だね。褒美に、三つともあげよつ」

そうして、ルリはロイズとともに、水晶の塊とアンモナイトの化石を手に入れた。

ロイズも闇雲に走つて温室に飛び込んだまではいいものの、穴を開いているとは知らずに中に落ちてしまつたらしい。

彼は穴から出されると、差し出されたルリの手から逃れて再び走り出そうとしたが、彼女の脇を通り過ぎたとたん、びたんと何かに打つかつて止まつた。

「 いら、ロイズ。温室の中では遊んではいけないと書つたでしょう

「 クロヴィス様つ！」

大きな葉達を搔き分けて、ルリが来たのとは別の方から顔を覗かせたのは、この屋敷の主であるクロヴィスだつた。

彼は足元にぶつかつたロイズが後ろに倒れる前に支えてやると、その衣服についていた土をぱんぱんと叩いてやる。

泣く子も黙ると恐れられる宰相閣下だが、意外に面倒見がいいようだ。

ロイズはそんな主人を慕わしげに見上げたが、先ほどルリに対して吐いた暴言をやんわりと諫められると、とたんにまた拗ねたような顔になつた。

「あつ、ひり、ロイズ」

そして、小柄な身体で生い茂る葉っぱの隙間を素早くくぐり抜けると、またもどこかへ走り去つてしまつた。

「ああ、やれやれ。難しい年頃ですねえ……。大丈夫ですか、ルリ。立てます?」

「あ、はい……申し訳ありません……」

クロヴィスは大きくため息をつくと、地面に座り込んだままになつていたルリの側にやつてきて、彼女助け起した。

そうして、先ほどロイズにしてやつたのと同じく、ぱんぱんと衣服の土を払つてやる。

恐縮するルリに苦笑しつつ、彼女の隣に並んで穴の方に向き直つたクロヴィスは、今度はその中からいまだ上半身を生やしている女性に声を掛けた。

「ハニーさんも。こんなところに穴を開けられでは困ります」

「ああ、すまないねえ。本当なら、温室の裏に出るはずだつたんだけど、どこかで計算を間違えたようだ」

クロヴィスに“ハニーさん”と呼ばれた女性は、彼に向かつて快活な笑みを浮かべると、「うんしょ」とようやく穴から上がつて來た。

下半身はだぼとしたパンツ姿で、その裾は厳ついハーフブーツの中に突つ込まれていて、もちろん泥に塗れてはいたが、ルリの印

象は“何だかワイルドで素敵な女神様”として固まつた。

その時、クロヴィスとルリの背後の茂みが、ガサガサと大きな音を立てた。

驚いて振り返つたルリの目の前で、大きく育つた葉が激しく揺れたと思ったら、その間から何かが飛び出してきた。

「ハーハー！ 帰つていたのかいっ！」

「ああ、ただいまアル。今帰つたよ」

満面の笑みを浮かべて両手を広げ、喜び勇んで駆け寄ってきたのはクロヴィスの祖父アルヴィースだつた。

スをした。

その仲睦まじい姿に、このハニーと呼ばれた女性はアルヴィースの恋人で、二人を眺めるクロヴィスの様子からして家族にも認められた仲なのだろうとルリは思った。

「ハーハーさん……女神様は、ハーハー様とおつしやるのですか？」

ところが、隣に佇むクロヴィスを見上げてそう尋ねたルリに対し、彼はふふと笑つて思つてもみない答えを返して來た。

「女神って何ですか？」の方……ハーマリア様は、前リュネブルク公爵夫人つまり、私の祖母です」

えええ～～～～つ！？

ハニマリア・オル・リュネブルク。

グラディアトリアの現宰相クロヴィスと、先帝ヴィオラントの生母マジエンタを生んだ女性であり、ヴィオラントが現在名乗っている旧公爵家レイスウェイク出身の女性である。

「」数十年、一度も社交界に顔を出したことのない彼女は、いつの間にかその存在を忘れ去られ、すでに亡くなつたと噂されるほどの人物だった。

なんと言つても、少し前に國中を巻き込んで盛大に祝われた、孫であるヴィオラントとスミレの結婚式にすら出席していなかつたのだ。

「」、「」存命だったのですかつ……！？ と、ルリは思わず心の声を盛大に吐き出してしまつた。

それを聞いたハニーマリアは、

「はいはい。生きてましたとも」

と語りて、豪快に笑つた。

ハニーさんこと、ハニーマリア・オル・リュネブルクは、貴婦人としてはたいへん規格から外れた人物であった。

そもそも彼女の祖父の代には、すでにレイスウェイク家は公爵の位を皇帝陛下に返上していた。

その理由は今ではもう定かではないが、かの家は特に容姿に秀でた一族であつて、当時の当主に時の皇帝の寵姫が惚れて不興を買つただとか、レイスウェイク家の娘に皇族のだれそれが誇かされただとか、説はいろいろ言われている。

とにかく、そうして国政の中央に居場所をなくした一族は、様々な事業へと手を伸ばして生計を立てることになる。

その一つが、鉱山の開発であった。

不慮の事故で亡くなつた父から、一人娘だったハニーマリアが鉱山発掘事業を引き継いだのは、彼女がまだうら若き乙女だつた頃だ。そして縁あつて、リュネブルク公爵家の背後に聳える鉱山の発掘を、彼女の会社が請け負つた。

その関係で懇意になつた若き頃のアルヴィースとハニーマリアは、身分の差を溢れる愛でもつて飛び越えて、夫婦となつた。

しかしながら、公爵夫人となつてもハニーマリアは家業を続け国内の現場を飛び回り、結果アルヴィースとともに優雅な社交界に出席する機会もなかなか恵まれなかつた。

それでも、二人の愛が冷めることはなく、マジエンタという絶世の美女を世に送り出し、彼女が生んだ孫一人は祖国を繁栄と平和へと導いたのだから、彼らの功績はある意味輝かしい。

「それで？ 今さら裏山を掘り返して、何をしようといふのです？」

「ああ、ちょっと探し物をね」

温室を出た一行は、最初にお茶をしていた応接室に戻り、新しい紅茶を入れ直して改めてルリの金柑ケーキを堪能していた。泥まみれだつたハニーマリアも軽く湯を浴びて、今はシンプルながらも上品なドレスに着替えて、見事な貴婦人へと変身していた。そんな彼女もルリのケーキを絶賛し、ぱくぱくと遠慮なく食べた。

「あの坑道は古いからいつ崩落するかも知れない。危ないからもう入っちゃダメだよ、ハニー」

「そうだね、探し物も見つかったし、あそこは閉鎖して埋めた方がいいかもしね」

リュネブルク家所有の鉱山では、過去には石英やその他の鉱物が出土たらしいが、その含有量はそれほど多くはなく、もう数十年も前に発掘は中止されたきりだ。

そのままになっていた坑道を辿つたハニーマリアは、今回その老朽化の激しさも確認してきたい。

中にはいる時に崩れれば当然命に関わるので、心配そうな顔をしたアルヴィースを安心させるように、彼女はもう入らないと約束した。

「ハニーさん、探し物とは？」

「ほり、これだよ。ラピスラズリ」

「ラピスラズリ？」

孫であるクロヴィスの問いかけに、ハニーマリアはおもむろに胸元に手を突っ込んだかと思うと、青い石の塊を取り出した。

そういう行動に見覚えがあると思ったクロヴィスとルリは、直後

「ああ……」と同時に合点がいった。

先帝ヴィオラントの愛妻 スミリのそれだ。

思わず苦笑する若い一人に氣づかぬまま、取り出した石をテープルの上に転がしたハニマリアは、そこに少々行儀悪く肘をつくと、ふつりとため息をついた。

「実は先日から、レイスウェイク家の脇の地層を掘つてたんだけどね」

「兄上、嫌がりませんでしたか?」

「スマレを味方に付けて、強引に口約を取り付けてやつた。あのちびっこい娘のおかげで、ヴィオラントが御しやすくなつてありがたい」

「……」

にやつと淑女にあるまじき笑いを浮かべた祖母から、クロヴィスは黙つて目を逸らした。

「ところが、門の外を手指して掘つていた穴が、間違えてレイスウェイクの屋敷の庭に出てしまつてね。その穴に運悪くスマレが落ちて足を挫いたもんだから、ヴィオラントにめちゃくちや怒られたよ」「当たり前ぢやないですか。スマレは兄上の宝物ですからね」

元々の無表情の上に、さらに氷を張つたような冷たい冷たい怒りを乗せた上の孫の顔を思ひ出して、ハニマリアは「お~、こわ~」と身震いした。

そんな彼女に、クロヴィスは呆れたようにため息をつき、ルリとアルヴィースはスマレの怪我を氣遣つた。

「スマレなら大丈夫だよ。本当に軽く足首を捻つただけなんだ。本人もさほど痛がつてはいなかつた」

「それは、よみかつた」

「でも、寝室に監禁されている」

「……軟禁でしょ、う？」

「いや、監禁だね。ベッドにこもりつけだからね」

ヴィオラントのスミレへの過保護っぷりには、いつものことながら驚かされる。

だがクロヴィスには、おかげで合点がいったことがひとつだけあつた。

あれほど堂々とバガメを宣言していた義姉が、いまだ姿を現さない理由

「なるほど、兄上に監禁されてるから来れなかつたんですね」「なるほど、だから私に観察レポートを命じる手紙が来たのか」

リュネブルク公爵家の男一人は、揃つてうんうんと納得した。

「スミレには可哀想なことをしてしまつたからね。お詫びに何か欲しいものがないかと聞いたら、あの子つたらラピスラズリが出てきたらくれつて言つんだ」

「なぜ、ラピスラズリ？」

「なんでも、クロヴィスに磨かせて宝石にするとか」

「……なぜ、私が名指しされるんでしょ、うか？」

「ラピスラズリはルリだからって……、それを名に持つ女の子にプレゼントさせたいとか、何とか」

それを聞いて、クロヴィスははたとあることを思い出した。

「ああ、なるほど。聞いたことがありますね……スミレの国にはルリといふ名の宝石があると。それが、こちらでいうラピスラズリといふことですか」

ラピスラズリは青い色の鉱物で、その和名を瑠璃といつぞや、スミレはルリに対してもその宝石の話をし、綺麗な青い瞳だと言つて褒めてくれた。

可愛らしい大公爵夫人が、自分のことをそんなに気にかけてくれていたと知つて、ルリはじんと胸が熱くなつた。

「昔、水晶と一緒にラピスラズリも裏の山で採れたことを思い出してね。見つけたから、スミレの希望通りそなたにやるよ、クロヴィス」

「はあ、ではありがたく頂戴します」

「それで、この娘がそのルリちゃんかい？」

クロヴィスに掘り出したばかりの鉱物を手渡すと、ハニマリアは小首を傾げるようにして、ルリに視線を向けた。

その言葉で、またしても自己紹介を忘れていたルリは、「し、失礼しましたっ！」と叫んで椅子から立ち上がり、彼女に向かい合つた。

「」挨拶が遅れて申し訳ありません。　ルリと申します。お会い出来て光栄です、奥様」

するとハニマリアは「ルリ……」と彼女の名前を口の中で転がしたと思つたら、美しい顔をいっぱいの笑顔の変えて言つた。

「可愛い名前だね、ルリ。よろしく」

差し出された手は、淑女のそれにしては節くれ立つて荒れてはいたがとても温かく、ルリの手をそれはそれは優しく握つた。

温かいリュネブルクの人々は、己の身の丈に合わぬ招待だと緊張を募らせていたルリを、ただ優しく穏やかに包み込んで解していく

れた。

そして、宰相として皇帝陛下とともに大国を背負つクロヴィスを、彼らがとても慈しみ愛していることが伝わってきて、ルリは何だかほつとした。

ルリが作った金柑のケーキは好評で、残すはあと一切れとなつた。ルリにはそれを食べてもらい人がもう一人いて、その願いを口にすべきか迷つていたが、勇気を出して隣で紅茶のカップを傾けるクロヴィスに声をかけてみた。

「あのっ、クロヴィス様」
「はい、何でしよう?」
「あの……このケーキなんですが……」
「はい」

クロヴィスに対する緊張がまだ拭いきれず、どうしてもしじろもどろになるルリの話を、彼は急かすことなく聞いてくれる。

これがもしも部下や弟皇帝相手なら、「さつさと用件をいいなさい。こっちも暇ではないんですよ」と冷たく一喝されているとも知らず、ルリは彼をなんて穏やかで聞き上手な方なんだろうと思つた。

「ロイズ君にも……食べてもらえるでしょうか?」
「……ルリは優しい子ですね。ロイズは随分あなたに失礼をしたで
しょうに」
「いいえ、失礼だなんて。……とても、クロヴィス様に懷いている
のですね」
「ああ、本当に珍しいというか、物好きな子ですよね、ロイズは。
元来子供に好かれるタイプじゃないんですねがね、私は」
「あんな小さい子でも、クロヴィス様が大変なお仕事をなさつてい
ると、ちゃんと分かつていいのではないですか。きっと、とて

も尊敬しているのです、クロヴィス様のこと

ルリが「私もとても尊敬しています」と、打算の欠片もない純真な笑顔を浮かべて告げると、クロヴィスは一瞬眩しそうに目を細めた。

そして、紅茶のカップをテーブルに戻したかと思つと、空いた手をさつと傍らのルリの肩に回して抱き寄せ、

「え……？」

彼を見上げた無防備な唇にキスをした。

ちゅっと一回、優しく触れるだけのキスを。

「～～～～～つ……！？」

「おいおい、クロヴィス。爺と婆の前で何するの」

「私たち、席を外そうか？」

とたんぽんっと顔を真っ赤に染めたルリと、ニヤニヤ笑いながら眺めるハニマリア、こそそ耳打ちしに来たアルヴィースに苦笑し、クロヴィスはルリの肩を抱いたまま告げた。

「いや、失礼。あまりに可愛らしかったものだから、つい。　と
ころで、この部屋にもう一人小さな客人をお迎えしましょうか」

クロヴィスはそう言つと、長い脚を一度組み直してから、扉の方に視線をやつた。

「そこにはいるのでしょうか。入ってきなさい」

彼の言葉を間近で聞いて、えつと顔を上げて扉を向いたルリの視

線の先で、かちやりと音がして取手が静かに動いた。

そして、おずおずと扉が開かれて、その隙間から顔を出したのは、眉を八の字にしゅんと大人しくなつたロイズだつた。

部屋の中に入ったロイズはそつと扉を閉めると、意を決したよう

にソファに座る主人の側までやつてきた。

そんな少年を見下ろすクロヴィスの瞳は、宰相執務室にいる時は想像出来ないほど、穏やかであった。

「君は賢い子だ。少し頭を冷やしたら、自分の言動を後悔してやつて来ると信じていましたよ」

「…………めんなさい、クロヴィス様……」

「それを言つのは、私にではないでしょ?」

そう優しく諭されて、ロイズは一瞬くつと唇を噛み締めると、恐る恐るといった風に上目遣いでルリの方を見て、いくらかの逡巡の末に小さく弱々しい声で「…………めんなさい」と言つた。

初対面で散々失礼なことをしてしまつた自分に、彼女が怒つているのではないかと不安なのだろう。

それがひしひしと伝わってきて、もちろん少しも彼に腹など立てていないルリは、につこりと笑つてロイズの小さな手を取つて、握手をするように軽く握つた。

「いいのよ。それより、お話できて嬉しいわ。私は、ルリっていうの」

「ルリ……さま?」

「いいえ、違うわ。ただの“ルリ”よ、ロイズ君」

「…………じゃあ、僕もただの“ロイズ”だよ」

「ええ、ロイズ。仲良くしてくださいね」

ふつくらと子供らしい頬を赤らめて、ロイズがいとけない仕草で

「つくりと頷くと、ルリはそれはそれは嬉しそうな顔をした。

そんな小さな少年と純真な少女の微笑ましいやりとりを、クロヴィスとその祖父母は優しい目をして見守っていた。

その後、金柑ケーク最後の一切れを「相伴あずかることになつた」といふは、大きなソファに並んでいたルリとクロヴィスの間にちょこんと座らされた。

そんな三人が並んだ姿を向かいから眺めた前リュネブルク公爵夫妻は、ふふと微笑み合つてこう言つた。

「そうしてると、そなた達は親子のようだな」

それに、ぴくりと秀麗な眉を動かしたのは、一杯目の紅茶に口を付けていたクロヴィスだった。

話が弾んでいてよく聞いていなかつたルリとロイズは、揃つてきよとんと首を傾げた。

そんな傍らの二人に、泣く子も黙る宰相閣下は爽やかな笑み??弟皇帝に言わせれば逆に薄ら寒くなる??を浮かべて向き直つた。

「いいですね、それ。ロイズ、ルリのことママと呼びなさい」

「え?」

「私のことは、パパと呼びなさい」

「……」

それを聞いたルリとロイズは、ぎょっとしてお互いの顔を見合わせたが、リュネブルク家の当主はいつになく上機嫌で紅茶のカップを空にした。

ルリは急遽、リュネブルク家の厨房にお邪魔することになった。それは、かの家の先代当主の奥方ハニーさんことハニーマリアのたつての願いによる。

「ヴィオラントの機嫌を直すには、あのちびっこ奥方を喜ばせるのが一番だからね」

思わず落とし穴を掘ってしまった土地主の怒りを買ったハニーマリアは、一時発掘を中断せざるを得なくなっていた。

元々は手付かずだった国有地を、十六年前に隣国から移り住んだロバート・ウルセルという男が開拓し、一年と少し前にハニーマリアの孫が譲り受けたレイスウェイク家の領地には、お宝の気配がブンブンする。

グラディアトリア自体は元来資源の少ない国なので、鉱物の産出にはそれほど期待はしないが、太古の昔の珍しい化石やらは埋っているかもしれないのだ。

発掘を再開するには、愛妻を怪我させられてへソを曲げてしまつた土地主　レイスウェイク大公爵ヴィオラントの許しが必要。そのためにハニーマリアは、彼が目に入れても痛くないほどで溺愛している少女に、貢ぎ物をすることにしたのである。

ヴィオラントの機嫌を左右するのは、ただ一人の奥方スミレだけ。そうして、お菓子作りが評判のルリに、白羽の矢が立つたのだった。

「どうしてハニーさんの尻拭いをルリがしなきゃいけないんですか。

「自分でなんとかなれってくださいよ。そもそも、せっかく彼女を屋敷に招待したというのに、少しは遠慮してやるのとは思わないですか？」

せっかく休日を捻出して、ルリとゆっくりするために家に連れてきたクロヴィスは、少しも一人っきりになれない状況に大いに不満げだ。

そんな彼の耳に、一やつと不敵な笑みを浮かべたハニマリアはこつそり耳打ちした。

「急いで事仕損じるよ、坊や」

「……坊やは、やめてください」

「厨房というのは家にとつて懐の中と同じ。それに迎えられることの意味を、まだあるお嬢さんは気づいていないようだけどね。女主人となればいずれ取り仕切ることになる場所に、馴染みをもたせておくのもいいではないか？」

「……」

ハニマリアはそう言つと、かすかに口端を引き上げた孫の背中をポンポンと叩き、何食わぬ顔でルリを厨房へと急き立てた。

もちろん、慎ましい性格のルリは、よそ様の厨房に図々しく足を踏み入れることを躊躇したが、先ほどの出迎えにも参加していた料理人達は、諸手を挙げて彼女を歓迎した。

それに恐縮しながらもお邪魔したルリの目に、まず飛び込んできたのが赤く艶やかなリングの山だった。

リングはお菓子にも料理にも使えるが、それにしても用意されている量が半端ない。彼女の視線でそれに気づいたらしくハニマリアが、苦笑しながら疑問に答えてやつた。

「うちの庭にね、大きなリングの木が一本あるんだよ。この時期に

なると一度にたくさん実を付けて、処分に困るほど」

「まあ……」

それを聞いたルリは、せっかくなのでそのリングゴを使ったお菓子を作ることにした。

サクサクしたクッキーの部分と、しつとりとしたスフレの部分の一層が組み合わさったリングゴケーキだ。

まずは、小麦粉・バター・砂糖に卵黄塩少々を混ぜ合わせ、クッキー生地を用意する。

それを一時間ほど冷たくして寝かせている間に、レモン汁と水の中に四分の一の大きさに切つたリングゴを漬込む。

型にクッキー生地を均一に敷き詰めた上に、水気をよく切つたリングゴとなるべく隙間なく並べ、その上にラム酒を含ませたレーズンをのせた状態で一度オーブンで焼く。

その合間に今度はスフレ生地を用意。卵白は念入りに混ぜてふんわりメレンゲにし、砂糖・卵黄・レモン汁を混ぜた中に加える。それを焼き上がったクッキーとリングゴの上に流し込み、中の空気を抜いてから再びオーブンで焼いて出来上がりである。

二度焼くことでクッキー部分はよりサクサクに仕上がり、サクサクとしつとりの一つの食感が楽しめる美味しいケーキになった。

手際よく作るルリを観察してたリュネブルク家の料理長は、こりやあ、わしもうかうかしてはいられませんなあ、と感心している様子。ルリが、お菓子作りは亡き母に習ったことを話すと、白髪混じりの料理長は、それは何より素敵なお形見をいただいたねと言って、優しい顔をして笑った。

ルリが厨房に籠っている間、クロヴィスは約束通りロイズを自室に招いてチエスを教えてやつた。

ロイズの母はリュネブルク家で出産したので、クロヴィスも赤子の頃から彼を知っていて、使用人の子とはいえもはや身内も同然だ。

排他的な雰囲気を持つ宰相閣下も、そんな子供を随分と可愛がっている。

ロイズは幼いながら賢く、頭の回転が早い。それを早くから見抜いていたクロヴィスとアルヴィースは、母を亡くして身寄りのなくなった彼を屋敷に住まわせる傍ら、貴族の子女にも匹敵する教育を受けさせるつもりである。

グラディアトリアの王宮は広く一般にも門戸を開き、身分に関わらず才能のある者を迎える入れていて。

だから、ロイズも勤勉に成長すれば将来城で職を得ることも可能であるし、宰相であるクロヴィスの執務室で働くことも夢ではないだろう。

小さくふっくらとした子供の手には、チエスの駒は随分と厳しく見える。

それを握りしめて真剣な目で盤を睨みつけるロイズの姿を、クロヴィスは紅茶を飲みながら満足げに眺めていた。

そうこうしていると、扉をノックする音が聞こえ、返事を待たずにそれを開いて部屋の中にすかずかと入ってきたのは、ハニマリアだつた。

いつの間にか訪問着に着替えており、さらにその後ろから同じく訪問着を身に着けたアルヴィースが続いた。

「おや、ハニーさんにおじいさま、揃つてお出かけですか？」

「ルリに焼いてもらつたケーキを、さつさと届けてくる。ヴィオラントがまだカンカンだと恐ろしいから、アルを連れていくよ」

「爺はハニーの盾になつてくるよ。無事帰れることを祈つてくれ」

ハニマリアの片手には、確かにケーキの箱が掲げられていて、ほんのり甘いい匂いが漏れ出していた。

「はあ、健闘を祈りますよ」

クロヴィスの祖父母は見送りはいらないと言い置くと、仲良く腕を組んで出掛け行つた。

そんな彼らと入れ替わりに、ルリが部屋に戻つてきた。

「ご苦労様、ルリ。面倒をかけてすみませんね」

「いいえ、クロヴィス様。お役に立てて嬉しいです。それに、厨房の方達ともたくさん意見交換できました」

「そうですか、それはよかつた」

ハニマリアの計画通り、ルリは女主人の縄張りたる厨房に見事に馴染んだようだ。

それを知ったクロヴィスは、秘かにほくそ笑む。

ロイズはまだ盤を眺めてうんうん唸つていた。

それを微笑ましく覗き込んだルリのために、クロヴィスは椅子を引いてやりポットに手を伸ばす。

ようやく彼にお茶を入れてもらうことに慣れてきたルリは、背後からスマートな仕草でテーブルに置かれたカップに礼を言い、早速香しいそれに口を付けた。

ところが、カップを置いてすぐに席に戻るものと思われたクロヴィスの気配が、何故かルリの背後から離れない。

不思議に思ったルリが後ろを振り仰ぐと同時に、なんと秀麗な顔が彼女の上に降ってきた。

「クッ、クロヴィス様っ？」

「……」

麗しき宰相閣下の高い鼻が、ちょうど振り返つたルリの前髪の生え際辺りに埋まる。

びくりと震える彼女をよそに、クロヴィスはすうっと肺一杯に息

を吸い込んだかと思うと、いやに色っぽいため息をついた。今日は下ろしているルリの栗色の髪が、その吐息でさらりと揺れる。

「甘い匂いがしますね、ルリ」

「えっと、あの……ケーキを焼いていたからでしょつか……」

「……実に美味しそうだ」

「……っ……！？」

クロヴィスはそのまま柔らかな髪に口付けるようにして、ルリの耳に囁いた。

とたん、ぱつと頬を赤らめたルリが身を引こうとしたが、それより早く動いた彼の腕がさつと背中に回り逃がさない。

「ああ、参りましたね……食べててしまいたい」

「ク、ク、クロヴィス様っ……！？」

突然のスキンシップ クロヴィスのちつちつな義姉に言わせれば立派なセクハラに、ルリはとにかくどきまきし、椅子に座つたままの彼女を腰を屈めて抱き寄せたクロヴィスは、さらさらの栗毛に尚も顔を押し付けた。

ロイズは、まだ彼らの向かいの椅子に座つてチェスの駒を握りしめている。

ルリは思わず彼に助けを求めて縋るような視線を送つたが、ロイズはちらつと一瞬二人を見るも、すぐに視線を逸らしてしまつてノーコメント。

それに愕然としたルリに「ふふふ」と笑うと、クロヴィスは再び彼女の耳に囁いた。

「ロイズは本当に賢い。うちの弟なんかよりも、よっぽど空気が読めますね」

いつぞや、いい雰囲気になつていたところを弟皇帝に邪魔されたクロヴィスは、まだ根に持つていたらしい。

そんな彼につむじやこめかみにキスを落とされながら、先ほど自らがケーキに入れたリンクのように真っ赤な顔をしたルリは、必死にその腕の中でもがく。

クロヴィスにそうされるのが嫌なわけでは決してないが、とにかく恥ずかしいのだ。

「ねえ、ルリ。……食べてしまつてもいいですか？」

「あつ、あのつ、ケーキでしたら同じのをもう一つ作りました！ 料理長さんが、夕食のあとのデザートにしてくださるとな！」

「ああ、それは楽しみだ。夜になつたらいただけるんですね、ルリ？」

「はつ、はい……ー？」

それはケーキの話をしているようでありながら、何だか本能的に身の危険を感じたルリは、ぶるりと身震いした。

それに返ったクロヴィスの笑みは、実に艶やかであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7254y/>

瑠璃とお菓子

2011年12月21日17時08分発行